

第 27 回 全国私立大学

附属・併設中学校・高等学校教育研究集会

立命館慶祥中学校・高等学校(北海道)

大会テーマ

「社会にひらかれた学校づくり 学校をもっと面白く」

2022 年 8 月 27 日(土)オンライン開催

午前の部 8:40-12:20

午後の部 14:00-16:40



立命館慶祥 海外研修「ボツワナコース」

第 27 回全国私立大学附属・併設中学校・高等学校 教育研究集会

諸連絡とお願い・・・・・・・・・・1 ページ

開催校あいさつ・・・・・・・・・・2 ページ

プログラム・・・・・・・・・・3 ページ

実践報告概要・・・・・・・・・・5 ページ

公開授業視聴時の設定について・・6 ページ

公開授業指導案・・・・・・・・・・9 ページ

記念講演・・・・・・・・・・47 ページ

分科会概要・・・・・・・・・・48 ページ

次年度開催校あいさつ・・・・・・・・49 ページ

諸連絡とお願い

1. Zoom 入室時について

Zoom 入室時、ビデオ・音声は OFF にしていただき、参加名を『学校名（略称可）__（スペース）名前』（合計 10 文字程度）に設定してください。

2. 録音・録画について

すべてのプログラムにおいて、録音・録画は控えていただきますようお願いいたします。

3. 報告集の作成及び参加者名簿について

研究集会終了後、2022 年度中に「報告集」を作成し、連盟加盟校及び当日参加者へ配布させていただきます。内容は、本研究集会の様子や参加者名簿等で、今年度より紙の印刷は行わず、電子データを配布させていただく予定ですので、予めご承知おきくださいますようお願いいたします。また、参加申込の際お伺いいたしました参加者名簿への掲載につきまして、「掲載可」としていただいた参加者の方々のお名前を名簿に掲載させていただきます。掲載に不都合がございましたら事務局までご連絡くださいますようお願いいたします。

4. 新型コロナ感染状況によるプログラムの変更について

新型コロナウイルスの感染拡大状況により、急遽プログラムを変更・中止させていただく場合がございます。変更になる場合は、参加申込の際ご登録いただきましたメールアドレスへご連絡いたします。

5. 当日の連絡先について

T E L : 080-3262-0560（立命館慶祥中学校・高等学校 運営事務局）

※開催日以前のお問い合わせは080-2464-9352（附属校サミット事務局）にご連絡ください。

メール : f-summit@st.ritsumeit.ac.jp

開催校より

世界が新型コロナウイルスに見舞われて、すでに 3 年目を迎えています。今年の黄金週間後の日本の感染者数については、人流の増加を反映したものか、一時は 4 万人超でありましたが、その後は、かなり抑えられておりました。しかし、7 月頃から感染者数の再拡大が報道されるようになり、夏休みを前にして「感染第 7 波」という言葉が各所で聞かれるようになりました。生命の安全を最優先しつつ、ウィズコロナ時代をどう生きるのか。このことが私たちに改めて問われています。

第 27 回全国私立大学附属・併設中学校・高等学校教育研究集会は、今年度、オンライン開催といたしました。現在、本校では、保護者会の年度初めの各種行事や授業公開等において、教室内にお客様を入れることをしておりません。慎重に対応しておりますのは、医療従事者が多い本校保護者の意見などをきめ細かく聴取し、対応しているからです。これらのことから、第 1 次案内では対面を想定し、実施計画を立てておりましたが、第 2 次案内において、オンラインの開催とさせていただきました。

第 27 回大会のテーマは、「社会にひらかれた学校づくり 学校をもっと面白く」です。今回、実践報告していただくのは、安平町教育委員会の教育次長である永桶憲義氏です。安平町は、道央圏の胆振管内に位置し、2023 年度に安平町立早来学園を開校します。早来学園は、早来地区で初の義務教育学校であり、隣接する公私連携幼保連携型の認定こども園とともに、地域の魅力を活かした教育を計画しております。

また、記念講演としてお話しいただくのは、北海道出身の CREATIVE OFFICE CUE 会長であり、映画監督・作家でもある鈴井貴之氏です。「教科書には書かれていない考える力」と題して、教育に一石を投じる話題について語っていただきます。公開授業は 7 つ。各授業についてオンライン配信する予定です。合評会もオンラインで実施します。授業の配信については、本研究集会初の試みとして、意欲的なものにしたいと考えております。分科会は 5 つ。ここでは、芝浦工業大学附属中学高等学校の岩田亮先生、横山浩司先生、小川賢一郎先生による「SHIBAURA 探究 IT のカリキュラム・デザイン」、平取町教育委員会の教育長 庄野剛氏による「アイヌの歴史文化を未来へつなぐ 文化伝承の現在」、株式会社カエカの小倉琳氏による「『話す力』の育て方 ～中高生向けスピーチトレーニングの実践～」をテーマとします。他に、本校卒業生らによる発表として、中学生起業家、ボツワナ研修旅行の 2 点を取り上げます。

さて、昨年度開催された第 26 回大会において、次年度開催校挨拶で「私ども立命館慶祥の全教職員が、数々の北海道の味覚とともに、首を長くしてお待ちしております。」と申し上げました。このことを実現できなかったことが、ひたすら心残りであります。当日、皆さまに対面でお会いできないことは残念でなりません。

しかし、オンラインによる交流は、今や通常の社会活動と考えられないこともありません。大切なのは、その後はどうするかだと思います。本研究集会で得られましたご縁を、いつか対面にまで発展させることができよう、オンラインであっても、中身の濃い研究集会となることを楽しみにしております。

立命館慶祥中学校・高等学校 学校長 江川 順一

第27回全国私立大学附属・併設中学校・高等学校教育研究集会 プログラム

2022年8月27日（土）

時 間	内 容
08：40～09：00	開会行事 連盟会長あいさつ、開催校あいさつ
09：00～09：50	実践報告 「2023年開校 地域の魅力を活かした安平町立早来学園の挑戦」 北海道胆振総合振興局管内 安平町 安平町教育委員会 教育次長 永桶 憲義 （ながおけ のりよし）氏
09：50～10：00	休憩
10：00～10：50	公開授業 国 語 「対話を核とした国語科の授業づくり」 指導助言：立命館大学 大学院 教職研究科（教職大学院） 教授 井上 雅彦（いのうえ まさひこ）氏 社 会 「授業と社会のつながりを生徒が自ら考える」 数 学 「探究心と深い学びを養う授業の実践」 理 科 「科学的にアウトプットする力を高める」 外 国 語 「Deep Dive through English」 ～インプットからアウトプットへの流れを意識した 実用的な英語力の強化～ 保健体育 「スポーツを通じた共生社会の実現に向けて」 外部講師：一般社団法人HOKKAIDO ADAPTIVE SPORTS 代表 齊藤 雄大（さいとう ゆうた）氏 司法講座 「外部講師と連携した独自の授業実践」 外部講師：ゆいと法律事務所 代表 弁護士 石塚 慶如（いしづか やすゆき）氏
10：50～11：00	休憩
11：00～12：20	記念講演 「教科書には書かれていない考える力」 北海道赤平市出身・在住 CREATIVE OFFICE CUE 鈴井 貴之（すずい たかゆき）氏
12：20～14：00	休憩 <u>13：00～13：50 実施連盟第17回総会(会員校代表者様はご出席ください)</u>
14：00～14：45	公開授業合評会 ① 各教科の2022年度の取り組みについて ② 授業者より参加者の皆様へ ③ 参加者の皆様から授業者へ ④ 質疑・応答
14：45～14：55	休憩

第27回全国私立大学附属・併設中学校・高等学校教育研究集会 プログラム

時 間	内 容
14 : 55~15 : 55	分科会 A ※加盟校による実践研究及び調査研究【募集B】採択校による研究発表 『SHIBAURA探究ITのカリキュラム・デザイン』 芝浦工業大学附属中学高等学校 岩田 亮（いわた りょう）氏 横山 浩司（よこやま こうじ）氏 小川 賢一郎（おがわ けんいちろう）氏 B 『「話す力」の育て方 ～中高生向けスピーチトレーニングの実践～』 株式会社カエカ 小倉 琳（おぐら りん）氏 C 『アイヌの歴史文化を未来へつなぐ 文化伝承の現在』 平取町教育委員会 教育長 庄野 剛（しょうの たけし）氏 生徒発表 I 『中学生起業家の誕生から今まで そして僕は海を渡る』 Brooks Secondary School （立命館慶祥中学校・高等学校出身） 平松 瑞翔（ひらまつ みずと）君 II 『これぞ立命館慶祥！ 日本初のボツワナ研修旅行について』 立命館大学国際関係学部 4回生（立命館慶祥高等学校卒業生） 細川 翔平（ほそかわ しょうへい）君 ※分科会・生徒発表につきましては、お申し込み時に希望された講演にご参加ください。
15 : 55~16 : 05	休憩
16 : 05~16 : 25	立命館慶祥の挑戦 ① どこにもない学校を目指す 全40コースの新海外研修旅行について ② 生徒がやりたいことを支援する学校の仕組み
16 : 25~16 : 40	閉会行事 連盟会長あいさつ、次年度会場校あいさつ、開催校あいさつ

【実践報告のご案内】「2023年開校 地域の魅力を活かした安平町立早来学園の挑戦」



安平町は、北海道の南西部に位置し、北は由仁町、東は厚真町、南は苫小牧市、西は千歳市とそれぞれに接しています。札幌市から直線で約50km、新千歳空港からは約14kmの位置にあり、交通の利便性に恵まれた地域にあります。年間平均気温は、6.5度と北海道の平均と比較すると温かく、年間降水量は1,000mm程度となっています。降水は7～9月に集中しており、冬期の積雪は北海道では少ない地域です。「安平」の名称はアイヌ語由来で諸説あり、「アラピラペツ」（一面・崖の・川）、「アラピラ」（片側・崖）、あるいは「アピラ」（光る崖、の意とされる）などがといわれています。町の基幹産業は農業。特に遠浅地区での乳牛生産は有名で、ここで改良された牛は全国

へと送り出されています。メロンも特産で、「アサヒメロン」のブランド名で知られています。また早来富岡の吉田牧場、早来源武のノーザンファームなど競走馬生産も盛ん。中央競馬で活躍し、種牡馬としても多くの産駒を送り出したマルゼンスキーや2005年に三冠を達成したディープインパクトもこの町で生産された名馬です。そんな安平町が、今、子育てと教育の町として注目を集めています。その中心にあるのが、今回ご紹介する新しい義務教育学校「早来学園」の挑戦です。地域の人材、教材を活かした魅力的なカリキュラムと社会共創機能を有した新キャンパスが間もなく誕生します。

自分が“世界”と出会う場所



安平町の
「自然」「地域」「文化」「人」に触れ、
支え、支えられる中で、
学校を通して「スポーツ」「テクノロジー」や
「異年齢、多世代」の人達、
たくさんの「本物」と出会い、
さらに
「色々な考え」「多様な価値観」「多くの学び」
「夢」とも出会い、
“世界”に生き、“世界”へと羽ばたいていく

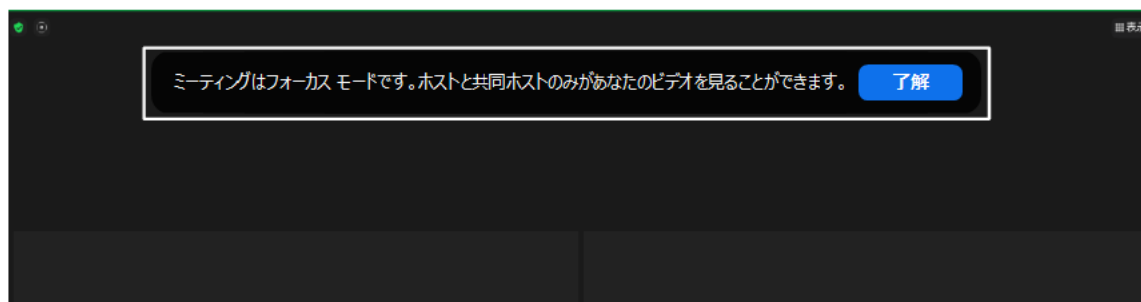
安平町早来学園開設 HP より

<安平町のメッセージ>

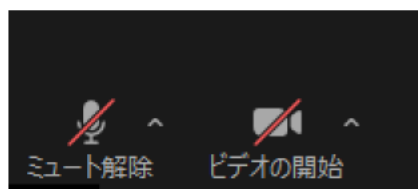
- ▶安平町に大自然があることを当たり前思わず、大切に感じてほしい。
- ▶安平町に住む地域の方々のおかりして、自分の住む町を良く知ってほしい。
- ▶学校生活を通じて、色々な年齢の方と出会い、自分と違う考え方に会ってほしい。
- ▶これらを通じて、児童・生徒のみなさんだけでなく、地域の方々の学べる場所になってほしい。

公開授業へご参加の際は、Zoom 接続後に下記の設定をお願いいたします。

1. 「ミーティングはフォーカスモードです。ホストと共同ホストのみがあなたのビデオを見ることができます。」とメッセージが出たら **了解** を押します。



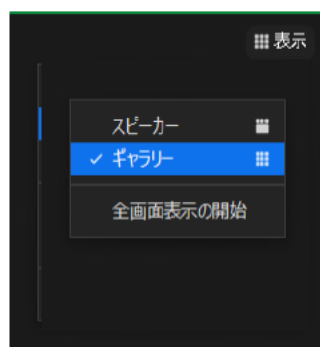
2. ビデオ、音声ともに OFF にしてください。



3. 『音声参加者を非表示』にします。

パソコンの場合

- ①画面右上『表示』からギャラリービュー表示に切り替えます。

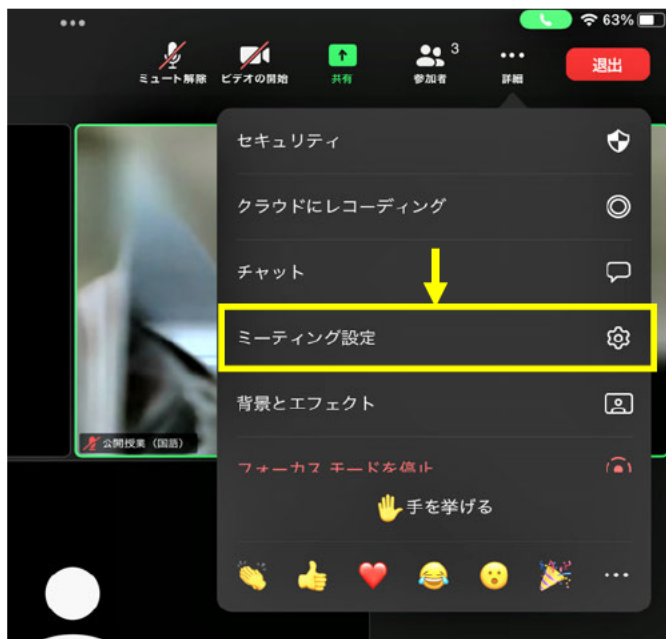


- ②自分が表示されている画面を右クリックして、「音声参加者を非表示」を選択します。



タブレットの場合

①画面右上『詳細』⇒『ミーティング設定』を選択します。



②『音声参加者の表示』を OFF にします。



スマートフォンの場合

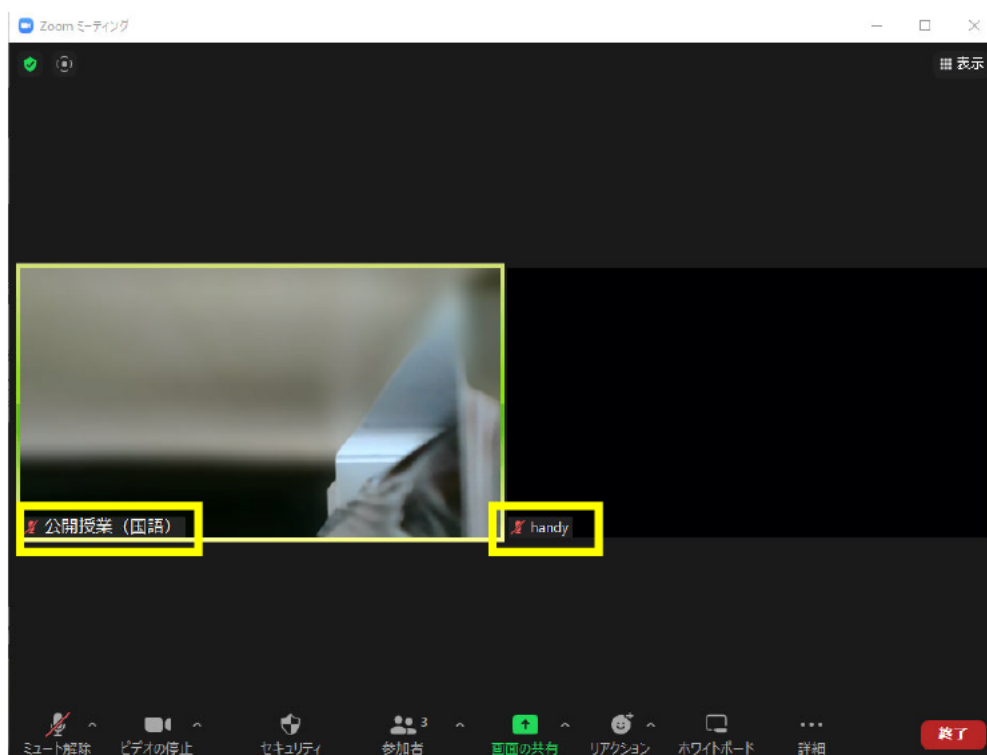
①画面右下『詳細』⇒『ミーティング設定』を選択します。



②『音声参加者の表示』を OFF にします。

ミーティング設定		完了
ミーティング		
ミーティングトピック	全国私立大学 附属・併設 中学校・高等学校 教育研究会実施連盟第17回総会	
ミーティング コントロールを常に表示	☐	
外見を補正する	☐	
参加者の参加時に名前を表示	☒	
音声参加者の表示	☐	
セルフビューを表示	☒	
着信ビデオを停止	☐	
接続時間を表示	☐	

4. 画面上に「公開授業（教科名）」と「handy」の 2 画面のみになっていれば設定完了です。



画面を大きく表示するには・・・

大きく表示したい画面上で右クリックまたはタップしてピンを選ぶことで、見たい画面を大きく表示できます。

公開授業 国語科 指導案

日 時 : 2022 年 8 月 27 日(土) 10:00-10:50

実施場所: Co-tan5 教室

対象クラス: 高校 1 年 D 組(34 名)

授 業 者 : 岩倉 衣梨奈

1. 授業名・単元名

【現代の国語】「三角ロジックを活用して「学校の困りごと」に解決策を提案しよう！」

2. 単元について（内容、単元の目標、評価方法など）

(1) 教材観

平成30年告示『高等学校学習指導要領国語科』の「現代の国語」の内容、「〔思考力、判断力、表現力等〕「A 話すこと・聞くこと」に、「ア 目的や場に応じて、実社会の中から適切な話題を決め、様々な観点から情報を収集、整理して、伝え合う内容を検討すること」とある。また、「〔知識及び技能〕「(2)情報の扱い方に関する事項」に「ア 主張と論拠など情報と情報との関係について理解すること」とある。

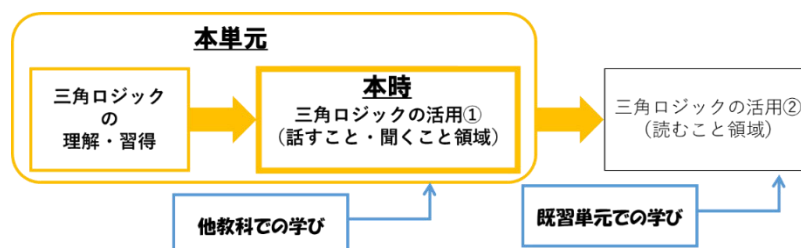
学習者は入学して半年が経ち、部活動や最大行事である学校祭も経験し、本校の生活にも慣れてきた頃である。毎日何気なく生活しているが、日々の生活の中で使用する施設や現状のルールなどの中には、改善が必要なものも多くある。学校は学習者にとって最も身近な実社会であり、多様な観点から捉えることができるため、生きた教材となる。本単元では、授業中での学びを学習者の最も身近な実社会である学校と結び付けるだけでなく、学校の抱える課題や問題点を「ジブンゴト」として主体的に捉える姿勢を育てたい。

また、知識及び技能として「三角ロジック」を習得させたい。「三角ロジック」はトゥルミン (S.Toulmin) の論証モデルを鶴田清司氏が簡略化改良した論理的思考のツールの一つである（「根拠・理由・主張の3点セット」ともいう）。「どのような主張なのか」「どのような事実やデータに基づいているのか」だけではなく、「事実やデータをどのように解釈したのか」を三つセットで考えることは、「話す」・「書く」といった自身の考えを表現する際にも、評論文の読解や文学的文章を解釈する際にも必要なことである。さらに、本校の新カリキュラムの中で、相手の意図や情報を正しく受信し、自身の考えを発信するという活動は、様々な科目の中で実施されているため、「三角ロジック」を習得することが、他の教科や領域の学びに繋がることを実感させ、国語を学ぶ動機付けにしたい。

(2) 単元観

本第3単元は、次の第4単元とセットで構成しており、2つの単位を通した目標は「三角ロジックの習得と活用」である。習得したスキルを「話すこと・聞くこと」領域で活用する本単元と、「読むこと」領域で活用する第4単元から成る。

本単元では、学校の課題解決に向けた提案をするという学習活動を設定した。また、年間の学びを通じて、既習の単元で



学んだことを活用させたり、「情報Ⅰ」や「課題研究Ⅰ」など他教科での学びを結び付けたりさせたい。

第一次では、夏休み前までの学校生活と学びを結び付ける。本単元は夏休み明け初めての単元である。そのため、入学してから夏休み前までの生活を振り返り、自分たちの生活の中にある身近な困りごとや課題について目を向けさせることで、生活も学びの題材になるということを意識させたい。また、最初から「三角ロジック」を教え込むのではなく、例示した意見文ではなぜ説得力がないのかを考えることで、「理由づけ」の必要性に気づかせたい。

第二次では三角ロジックの理解・習得を目標とする。「主張」「根拠」「理由づけ」がそれぞれどのような役割を持つか説明をし、練習問題やロールプレーを通して「理由づけ」の必要性や「根拠」と「理由づけ」の違いについて整理し、三角ロジックについて理解を促す。

第三次では、学校の様々な課題について三角ロジックを用いて解決策を提案するという活動を設定した。習得したスキルを実践的に活用するだけでなく、課題解決のための新たな提案をするという学習活動にすることで、「言われたことに真面目に取り組む」だけの学習者からの脱却を促したい。また、4人1組の班で「課題解決のための新たな提案」を行うことで他者との対話を促し、自身の考えを広げたり深めたりする機会としたい。さらに、他教科での学びとの繋がりも意識させたい。学習者は「情報Ⅰ」や「課題研究Ⅰ」の授業の中で、調べたことをパワーポイントで作成した資料を用いて発表したり、データを読み取った上で分析したりするといった学習活動を経験している。「学びのつながり」を生徒が実感できる単元として位置付けることで、自身の成長や学ぶことの意義を実感できるような授業にしていきたい。

(3)単元の目標

- ・言葉がもつ価値への認識を深めるとともに、生涯障害にわたって読書に親しみ自己を向上させ、我が国の言語文化の担い手としての自覚をもち、言葉を通して他者や社会に関わろうとする（学びに向かう力、人間性）
- ・目的や場に応じて、実社会の中から適切な話題を決め、様々な観点から情報を収集、整理して、伝え合う内容を検討することができる（思考力・判断力・表現力等）
- ・「三角ロジック」を理解し、活用することができる（知識・技能）

(4)単元の評価規準

主体的に学習に取り組む態度	思考力・判断力・表現力（話す聞く能力）	知識・技能
・現状の課題を踏まえた上で粘り強く解決のための提案を考えようとしている ・相手の理解が得られるように表現を工夫しようとしている	・目的や場に応じて、実社会の中から適切な話題を決め、様々な観点から情報を収集、整理して、伝え合う内容を検討している	・「三角ロジック」を理解し、活用できている

3. 単元の計画

次	学習活動(時数)	指導上の留意点	評価基準
1	導入(1時間目) ○入学後から夏休みまでの学校生活を振り返り、学校生活での「困りごと」を挙げる ○ある学校の生徒の意見書を読み、説得力がある主張になっているか、また、説得力を持たせるには何が必要かを指摘する ○単元を貫く問いを知る 三角ロジックを活用して「学校の困りごと」の解決策を提案しよう！	・「高校生」「中学生」「教員」「事務職員」「清掃スタッフの方」「来客者」「保護者」などの多様な立場から考えるよう促す ・他者が書いた文章を客観的に評価することで、説得力を持たせるには何が必要なのかを考えさせる ・単元を貫く問いを提示することで学習の見通しを持たせる ・課題解決について考えたり、提案したりすること、また、説得力のある主張をすることの重要性を理解させ、学習への意欲を喚起する	A 意見書について説得力がある主張になっているかを3つ以上の理由を挙げて評価できている B 意見書について説得力がある主張になっているかを2つ程度の理由を挙げて評価できている C 意見書について説得力がある主張になっているかを理由を挙げて評価できていない
2	展開(2時間目) ○本時の目標を知る 「三角ロジック」を理解し、三点セットが揃った主張をしてみよう ○「三角ロジック」について説明し、次の3つのポイントを押さえる ・主張 =書き手・話し手の考えや価値判断 ・根拠 =客観的な事実・データ ・理由づけ =主張と根拠が繋がる理由 ○練習問題で「三角ロジック」に慣れる ・【主張】【根拠】に合わせた【理由づけ】を考える ・【主張】に合わせた【根拠】【理由づけ】を考える	○難易度をいくつか設定し、問題に取り組ませる ○【根拠】が同じであっても【理由づけ】が異なると【主張】も変わること気づかせる	A 三角ロジックを理解し、主張に合わせて根拠・理由づけをいつも考えることができる B 三角ロジックを理解し、主張に合わせて根拠・理由づけをおよそ考えることができる C 三角ロジックを理解し、主張に合わせて根拠・理由づけを考えることができない

次	学習活動(時数)	指導上の留意点	評価基準
3	まとめ① (3 時間目)【本時】 ○三角ロジックについて復習する ○本時の目標を知る 三角ロジックを活用して「学校の困りごと」に解決策を提案しよう！ ○活動の流れと内容についての説明を受ける ○班活動 ・三段階の対話で解決策の提案まで考える ○中間発表 班をミックスして、他の班の現段階での中間発表を聴き、アドバイスをし合う まとめ② (4 時間目) ○本時の目標を知る 「学校の困りごと」と解決策について、相手に伝わるように発表しよう！ ○発表時の留意点を確認する ・1回の発表は5分以内 ・1チーム4回発表を行う ・発表者は各回1名で、残りの3名は他の班の発表を聞きに行く ・内容について ・話し方について ○班内での最終確認 ・前時の中間発表で他の班から受けた指摘の確認・修正をする ・発表内容を共有する ・話し方をチェックする	○他の班の人に提案を聞いてもらうことで、3点セット（【主張】【根拠】【理由づけ】）の繋がりが適切か、確認を促す ○内容については、学校のシステムや施設を知らない人が聴いてもわかるような工夫を促す ○話し方については、相手に伝わりやすいような工夫（資料をそのまま読むだけではなく補足や言葉を変えるなど）を促す ○内容の補足や話し方の工夫について班の中で共有し、発表に備える時間とさせる。適宜机間巡視し、アドバイスを行う	A 主張・根拠・理由づけの3つが揃っており、理由づけによって論理的に繋がっている B 主張・根拠・理由づけの3つが揃っているが、論理的には繋がっていない C 主張・根拠・理由づけの3つが揃っていない A 班の提案を理解した上で、相手を意識した内容や話し方の発表ができる B 班の提案を理解した上で発表ができる C 班の提案を理解しておらず、資料を読むことに終始している

次	学習活動(時数)	指導上の留意点	評価基準
	○発表(5分×4回) ・自分が聴いた班の発表について評価シートを記入 ○評価シートの整理・振り返り	○発表について ・間に入れ替え時間を数分とる ・あらかじめこの班の発表をいつ聞くかの割り振りをしておくことで、スムーズに入れ替えができるようにする ・入れ替えと評価シートの記入時間を取り、評価シートはロイロで提出させる ○本单元全体についての振り返りを行う ①三角ロジックについて(教科内容) ②他者に向けた発表について(話すこと) ③班活動について(協働) の3点について振り返りを記入させる	

4. 生徒観

学習者は、高校から本校に入学してきた生徒である。学習課題に真面目に取り組む生徒が多く、協働的な学びの場面でも積極的に意見を出し合いながら活動することができるが、「言われたことに真面目に取り組むこと」に終始し、自分達で新しいものを生み出すという点には課題が見られる。

今年度の高校1年生国語科では「教材との対話・他者との対話・自己との対話を通して国語の学び方を学ぶ」を目標として設定している。そのため、授業内では上記の3つの対話を盛り込んだ授業づくりを心掛けている。本年度の第1単元では短編小説を教材として、本文を根拠として「読解」したり、「解釈」したりすることを学んだ。また、第2単元では評論「水の東西」を教材として、「具体と抽象」「対比」といった文章の構造をもとに筆者の主張を読み取り、グループで要約する活動を行った。

5. 指導上の留意点 単元計画に記載済み

6. 本時について(3/4時間)

(1) 本時の目標

論点を共有し、考えを広げたり深めたりしながら、「三角ロジック」を活用して班の提案を作ることができる

(2) 評価基準

A評価：主張・根拠・理由づけの3つが揃っており、理由づけによって論理的に繋がっている

B評価：主張・根拠・理由づけの3つが揃っているが、論理的には繋がっていない

C評価：主張・根拠・理由づけの3つが揃っていない

(3) 準備物

デジタルデバイス・説明用資料

7. 本時の計画

時間	学習活動	指導上の留意点
10分	1. 導入(10) ○三角ロジックについての確認 目標:三角ロジックを活用して「学校の困りごと」に解決策を提案しよう! ○活動の流れと内容についての説明	
25分	2. 展開(25) ○班活動 ①意見を広げる対話 1時間目考えた学校における困りごとをグループで交流して、困りごと（課題）を一つに決める ②困りごと（課題）について深める対話 困りごととはどのような課題なのか・何が原因なのかを考える【根拠】 ③新しいものを生み出す対話 解決策を考え、三角ロジックに当てはめて説得力のある提案にブラッシュアップしていく【主張】【理由づけ】	①について ・マインドマップを活用し、自由に考えを広げるよう促す ・個人で考えを持った後に班活動に入ること、班活動への参加を促す ・課題が偏らないように机間巡視の中である程度指定する ②について ・①で記入したマインドマップを使い、さらに深める形で話を展開するように促す ③について ・自分達が考えた提案がどこに焦点を当てて考えたものなのかを明らかにするように指示する【理由づけ】 ・【根拠】と【主張】が繋がっているかを確認させる
15分	3. まとめ(15) ○中間発表 班を解体して、他の班の中間発表を聴き、アドバイスをし合う ○振り返りの記入	○聞き手は次の観点で気づいたことを指摘し、話し手側はメモを取る〈観点〉 ・【理由づけ】【根拠】【主張】のうち不足しているものがないか ・三角ロジックが成立しているか ・話し方や提示の仕方のアドバイス ○ロイロで振り返りを記入し、提出させる

公開授業 社会科 指導案

日 時 : 2022 年 8 月 27 日(土) 10:00-10:50

実施場所: Co-Tan2 教室

対象クラス: 高校 1 年 I 組(36名)

授 業 者 : 山本 和徳

1. 授業名・単元名

歴史総合・近代化への問い／近代化と現代的な諸課題

2. 単元について（内容、単元の目標、評価方法など）：近代化への問い／近代化と現代的な諸課題

世界史分野で学んだことを振り返ることで「近代化」の概略・概念を確認し、次に学ぶ日本史分野を学ぶ時のために多角的な視点を獲得することを目標とする。

生徒たちはすでに世界史分野において、産業革命と資本主義、市民革命と国民国家とその諸問題を学習している。本時では、教科書では「近代化」の最初と最後に設定されている単元「近代化への問い」と「近代化と現代的な諸課題」を、世界史分野と日本史分野の学習の切り替え時に設置し、「近代化のなかの先住民」をテーマとして、「問い」を立てながらテーマに対する理解を深め、その上で、世界史分野と日本史分野の共通点・相違点と、現代に続く問題を考察する。

授業の最後には振り返りシートを書いてもらい、内容・表現・グループワークの活用といった観点で評価をする。

3. 単元の計画

時間	学習内容	留意点
1	太平天国と洋務運動 ≪世界史分野の最後≫	・洋務運動と明治維新の比較の視点を提示
2	近代化への問い	・世界史分野で学んだ「近代化」を振り返る
3	近代化と現代的な諸課題(1)	・「近代化のなかのアメリカ先住民」を考察する
4	近代化と現代的な諸課題(2) 本時	・「近代化のなかのアイヌ」を考察する
5	日本への通商の要求と対応 ≪日本史分野の最初≫	・世界史分野で学んだことと比較する
6	開国とその影響	・世界史分野で学んだことと比較する

4. 生徒観

一貫クラス（立命館慶祥中学校からの進学）の生徒で、中学校のときから社会科の学習に熱心に取り組む者が多い。世界史分野を学ぶ際にも、中学校で学んだ歴史（日本史）の知識を活かしたり、新しい「発見」にも興味をもって取り組むことができる。

5. 指導上の留意点

本時の目的の1つは歴史上の事例から、「近代化が世界・日本に共通して与えた影響」といった概念を抽出する（抽象化）ことにある。しかし、歴史を「単純化」「法則化」してしまう危険性もあるので、あくまでも歴史を大局的に見るための方法であり、個別具体的な事象も学び、多角的に事例を分析する必要もあることには注意を促したい。さらに、先住民というテーマ学習を通じて、生徒たちが今後「世界史探究」「日本史探究」に取り組む際の参考となるように留意もしたい。

6. 本時について

大枠として、個（自分なりの「問い」をたてる）→協働（グループワークで「問い」を磨く・テーマの要点を作る）→個（グループで得た学びを自分なりにまとめ直す）という形で進める。

7. 本時の計画

	学習活動・生徒活動	教師の関り	留意点
導入 (5分 程度)	①前時の学習の成果を確認する	前時の授業で生徒がロイロノートに入力したものを紹介	今回の学びに活かせるものをつかむように留意させる
展開 (35分 程度)	②教科書・資料集・配付資料を読み、「近代化」「世界の歴史との比較」の観点をふまえて、各個人で「問い」（追求したい点）をたててみる。（5分程度） ③【グループワーク】互いの「問い」を持ち寄り、「近代化のなかのアイヌ」の核心にせまることができる「問い」を作る。 →ランダムで選ばれた1グループが発表。（15分程度） ④【グループワーク】これまでの学習を活かして「近代化のなかのアイヌ」を80字以内でどのように表	教科書の記述内容の注意点に触れる。 机間巡視をし、各生徒の質問対応などもする。	「協働」のための準備として、「個」の作業に集中するように留意させる より良い「発見」「学び」をするための「協働」であることに留意をさせる。

	現できるか検討する。 →ランダムで選ばれた 1 グループ が発表。(15 分程度)		
まとめ	⑤前時と本時で得た学びを活かし、「近代化のなかのアメリカ先住民」と「近代化のなかのアイヌ」の共通点・相違点をまとめる。 →ロイロノートに入力	机間巡視をし、作業につまずいている生徒をサポートする。	協働で学んだことを個に立ち返り、まとめることに留意をさせる。

8. 本時の評価規準

観点	【知識】	【協働】	【表現】	【思考】
規準	・前時・本時の両方の授業で得た内容をまとめることができる。	・グループワークにおいて、他者の意見を取り入れ、なおかつ自分の意見を見直すことができる。	・事実的な誤りをすることがなく、適切な言葉で表現することができる。	・グローバルな視点で、「近代化」と現代のアイヌが抱えた問題について考えることができる。

9. 本時の使用教材

教科書：『歴史総合 近代から現代へ』（山川出版社）

副教材：『明解 歴史総合図説 シンフォニア』（帝国書院）

配布物：教員作成プリント、ワークシート

公開授業 数学科 指導案

日 時：2022 年 8 月 27 日(土) 10:00-10:50

実施場所：Co-Tan4 教室

対象クラス：3 年 6 組(36 名)

授 業 者：根岸 雄登

1. 授業名・単元名

【代数】2 次関数の平方完成と放物線の頂点（数学 I，2 次関数：2 次関数とグラフ）

2. 単元について（内容、単元の目標、評価方法など）

(1) 単元内容

第 2 章 2 次関数

第 1 節 2 次関数とグラフ

第 1 項 関数とグラフ

第 2 項 2 次関数とグラフ

（1st：放物線の平行移動，2nd：放物線の頂点（★），3rd：グラフの移動，4-5th：探究活動）

第 3 項 2 次関数の最大と最小 第 4 項 2 次関数の決定

第 2 節 2 次方程式と 2 次不等式

第 5 項 2 次方程式 第 6 項 グラフと 2 次方程式 第 7 項 グラフと 2 次不等式

※上記の章立ては、使用教材である『数学 I』（数研出版）のものと同一。

※「★」が本時の授業内容。

(2) 単元目標

- (i) 関数の概念を理解する。
- (ii) 関数の値の変化は、グラフを描くことで把握し易くなることを理解する。
- (iii) 関数は、区間の端点か極値（頂点）でのみ最大値・最小値を取ることを理解する。
- (iv) 方程式・不等式の解は、関数のグラフを描くことで把握し易くなることを理解する。

3. 生徒観

授業学級は、学年の学力上位生徒を集めた学級の 1 つであり、最難関大学（東大・京大・医学部医学科）に合格する水準まで生徒の学力を高めることを最上位目標としている。

授業学級には数学が得意ではない生徒が半数近くいるため、「できるから数学を学ぶ¹」というサイクルを作りづらく、年度当初は、数学を学ぶ目的が「やらなければならないから」、「周りの人がやっ

¹ Garon らが 2015 年に発表した、内発的動機付けと算数の成績との関係についての論文を踏まえている。この論文によれば、1,478 人のカナダ人小学生を 4 年間追跡調査した結果、算数の成績を上げるのに影響を与えたのは、算数に対する内発的動機付けと算数の好成績との両方ではなく、算数の好成績の一方のみであることが分かった。

ているから」、「親が望むから」等、消極的な生徒が少なくなかった。もちろん、彼らの少ない人生経験を鑑みれば、そのように考えてしまうことも当然ではある。一方、本校が育てることを目指す生徒像は、「世界に通用する 18 歳」である。これを実現した生徒は、学習という観点から見れば「生徒が自ら興味を見つけ、必要性に応じて適切に学び、かつそのサイクルを継続できる」人物である。つまり、生徒が高い学力を身に付けることよりもむしろ、彼らが将来、自分を管理する誰かがいなくなったとしても、自分の人生や周りの環境をより良くするために自ら学び続けられる人間になるように働きかけることが、私たち立命館慶祥中学校高等学校の教員が第一に達成すべき目標である。そしてこれに次いで、最上位の学力が身に付くような授業とは何か？ということを考えるべきである。

4. 授業観

前項を整理すると、私が授業を通して教員が行うべきだと考えるのは「生徒が自ら興味を見つけ、必要性に応じて適切に学び、かつそのサイクルを継続できるように変容するための介入」である。そこで、授業を次のようにデザインする：

- (1) 授業内で「あなたが数学を学ぶ目的は何か？」「この授業で何を達成するか？」を考えてから活動するように毎時間声掛けをする。
- (2) 教員が教える分量は必要最低限に留め、生徒たち自身が活動する時間をできるだけ多く取る。
- (3) 生徒同士がお互いの解法について交流する時間を毎時間取る。
- (4) 解き方を覚えればすぐに分かる問題だけでなく、独力では解くのが難しい問題も与え、生徒が互いに交流することを促す（本時の授業では行わない）。
- (5) 最低限使いこなせるようになってほしい計算技術や解の導出技術は、経験によって生徒自身が見いだせるように、授業内での問題演習の時間を十分に取り（本時の授業では行わない）。

5. 本時の目標

一般形の 2 次関数の式を与えられたとき、そのグラフの頂点を求める方法を理解する。

6. 本時の計画

	生徒の活動	教師の介入	留意事項
導入 (27 分)	・教師の説明を聞く。 ・教師から指示を受けたら問題を解き始める。 ・20 分経過後、この後の解答および解法の交流の時間中、自分が何を達成するかを考える。	・本時のプリントを配布する。 ・本時の目標が ① 平方完成の方法を全員が理解する ② 一般形の 2 次関数の頂点の座標を全員が求められるようになる - の 2 点であることを伝える。 ・問題を 20 分で解くように指示をする。 ・20 分経過後、この後の解答および解法の交流の時間中、自分が何を達成するかを考えるように伝える。	・問題を解く 20 分は 1 人で解く時間であることを確認する。 ・左記の内容に加え、「どうしたら交流を通して自分と相手の理解が深まるか考えてほしい」ことも併せて伝える。

展開 (20 分)	・自分の導いた答えと、その答えに至るまでの過程を他の生徒と交流する。分からない問題があった生徒は、分かっている生徒を探して、考え方を聞く。そうでない生徒は、できるだけ多くの生徒と交流する。	・机間巡視をする。	・他の生徒と交流していない生徒には声をかけ、今何を考えているか聞き、問題の解法が分からないようであれば、他の生徒と交流するよう促す。問題を解いているようであれば、そのまま解かせておき、交流を強要しない。
まとめ (3 分)	・教師の話聞きながら、本時の振り返りを行う。	・教師から見た本時の活動の様子を伝える。また、交流前に自分で立てた目標を達成できたか振り返るよう促す。 ・次回の授業予定を伝える。	

(留意事項) この授業よりも 1 回前の授業で、 $y = a(x - p)^2$ のグラフが x 軸方向に平行移動することを生徒たちが考える授業を実施している (その際に使ったプリントは別紙参照)。

7. 本時の評価基準

授業学級の生徒全員が、能動的に授業に関わっているかどうか。

以上。

問題 次の問いに答えなさい。

(1) 2次関数 $y = x^2$ のグラフをかけ。

(2-1) 点 $(2, 2^2 + 1)$ は点 $(2, 2^2)$ をどのように移動させた点か。「 y 軸方向」「平行移動」の両方を用いて答えよ。

(2-2) 2次関数 $y = x^2 + 1$ のグラフをかけ。また、なぜそのようなグラフになるか、理由を述べよ。

(3-1) 点 $(2, (2+1)^2)$ は点 $(2, 2^2)$ をどのように移動させた点か。「 y 軸方向」「平行移動」の両方を用いて答えよ。

(3-2) 2次関数 $y = (x+1)^2$ のグラフをかけ。また、なぜそのようなグラフになるか、理由を述べよ。

<ヒント：グラフの定義>

「関数 $y = f(x)$ を満たすような点 (x, y) ，すなわち点 $(x, f(x))$ 全体で作られる図形を，この関数のグラフという」
(教科書『数学 I』 p77 より抜粋)

公開授業 理科 指導案

日 時 : 2022 年 8 月 27 日(土) 10:00-10:50

実施場所: 立命館慶祥中学校・高等学校 化学室・生物室・物理地学室・アトリウム／札幌市中心街

対象クラス: 3 年 D 組(31 名) (立命館大学進学コース理系)

授 業 者 : 福田貴之(化学・課題研究)、菅原陽(物理)、高橋梨緒(生物)、八島弘典(化学)、山本修(地学)

1. 授業名・単元名

SS 科学実験・各担当教員による小人数グループ実験

2. 学校設置科目「SS 科学実験」について

本科目は、高3 学年立命館 SS コースを対象とした学校設定科目である。「物理」「化学」「生物」「地学」の領域、もしくは、これらの 2 領域以上に関わった学祭的な科学に関するテーマについて講義と実験を行っている。これにより、学問領域にこだわらず、複数の学問を融合的にとらえる力を身につけさせることを目的としている。

年度ごとに4～5名の担当教員を配置し、それぞれの専門性と挑戦志向に基づいた実験テーマを持ち寄ることで、幅広い分野と切り口の実験を生徒に提供することができる。また、生徒を担当教員数のグループに分けて少人数実験を実践することにより、きめ細かく実験手法やレポート作成を指導することができ、かつ4～5週でグループが1巡する形式は、個々の教員の準備負担軽減にも寄与している。加えて、年に数度の外部講師による出前授業や、オンラインでの遠隔授業なども実践している。

当該クラスは、本科目とは別に4単位の「課題研究」を履修しており、そこでは年度を通じて各自の興味に応じた個別のテーマによる研究を進めるため、研究目的に合致した実験デザインの能力の育成は不可欠である。本科目において、幅広い実験手法、アプローチの仕方、データ分析などについて気付きを得ることで、有機的な探究活動が形作られると考える。

3. 公開授業に関する留意点

本科目の通例の授業は2時間1コマで実施しているため、本時の公開授業に際しては今年度の教科テーマである「科学的にアウトプットする力を高める」ことに貢献しうると考える内容を各担当教員で設定した。本公開授業においては、ZOOMを5部屋に分けるため皆様のご見学に際して大変なご面倒をおかけすることをお詫びしつつ、年間での運営の在り方と実践例の一部についてご視察いただき、内容の向上について忌憚のないご意見をいただきたい。

4. 生徒観・指導上の留意点

当該クラスは、立命館大学の主に理系学部へ内部推薦で進学する生徒が在籍している。好奇心をもって新しいことに取り組む気概は申し分なく、学業を含めた学校生活全般に前向きな雰囲気がある。しかしながら内部推薦クラスの特長として、各科目における基礎事項の定着が極めて弱い傾向がある。したがって、本科目の運営では、実験背景の理解や考察に必要な既習事項を主体的に復習しながら取り組める工夫が求められる。基本的な実験器具の扱い方にも不安がある生徒が多く、一人一人が自分で実験と向き合う環境を作り、研究・実験計画を立案できるようになる素地を養うことが求められる。

今年度は、各実験のレポート作成に関する指導・フィードバックを毎回の初めに実施することにして
いるが、現段階では各担当教員の裁量で内容を設定しており、今後は共通の軸となる評価指標やルー
ブリックの策定が必要である。

5. 年間計画概要（過去実績、予定も含む）

No	実験タイトル	概要	配当 時間
01～05	流体熱気球他、二段階滴定、銅の旅、 反応速度、紫外線	担当 5 人による小グループ実験 <第 1 ターム>	2 × 5
07	最先端音響技術を体験しよう！	遠隔授業（立命館大学情報理工学部）	2
08	Seismic Excitement	土木工学特別授業（本校英語科教員）	2
私学 サミット	スマホセンサー、プラスチックバネ、 ウミホタル、電池、ビル街化石	出前授業（詳細は下記参照）	2
09～13	分光器、維管束、反応の量的関係、硫 黄・ハロゲン、電気分解	担当 5 人による小グループ実験 <第 2 ターム>	2 × 5
14	電子回路	出前授業（公立千歳科学技術大学）	2
15	害虫のおにやんま忌避の検証	オンライン授業による課題解決型学習	2
16～20	形状記憶、過冷却、電池、イオンの推 定、LED と FET	担当 5 人による小グループ実験 <第 3 ターム>	2 × 5
21	聴覚のふしぎと音響機器の進化	遠隔授業（立命館大学情報理工学部）	2
22	伝統音楽と音声のふしぎ	遠隔授業（立命館大学情報理工学部）	2
23～27	竜巻音振動 芳香族化合物 コンデンサー 卵の体積の測定	担当 5 人による小グループ実験 <第 4 ターム>	2 × 5

6. 本時について（題目、授業者、場所、ブレイクアウトルーム名称、概要）

「スマホのセンサーを使おう～巨大振り子編～」	
授業者： 福田 貴之 場所： アトリウム ブレイクアウトルーム： 「振り子」	生徒の大半が持っているスマホには様々なセンサーが内蔵されており、それらを簡易的にグラフ化する無料アプリも様々に考案されている。スマホを振り子に見立てることで、加速度計より振動のグラフを得ることができる。10 往復にかかる時間を 10 で割って周期を求める従来の手法と比べて、スマホ振り子から抽出したデータから周期を求める手法のもつメリット・デメリ

	ットを考える。また、実験機器や測定手法、あるいは公式の中の近似など、誤差を生む要因について検討する。
--	--

「プラスチックバネによる力学的エネルギー保存則の検証」	
授業者： 菅原 陽 場所： 物理地学教室 ブレイクアウトルーム： 「バネ」	鉛筆とプラスチックバネをひっかけてジャンプさせ、バネの伸びとジャンプする高さの関係をグラフ化し、おおむね2乗に比例して高くなることを体験する。可能な限り沢山の試行回数のデータをエクセルに集積しながらグラフ化することで、グラフがどんどん近似直線になっていくことを目の当たりにする。

「ウミホタルの謎を暴け！」	
授業者： 高橋 梨緒 場所： 生物教室 ブレイクアウトルーム： 「ウミホタル」	科目「生物」と関係の深い実験・観察を通して、課題実験などに必要な生命科学の研究デザインに必要なスキルや考え方のより深い育成を目指し、展開している。ただし、生物を扱う実験は、培養・観察などに長い時間を要するものが多い。そこで、今回は比較的短時間で変化が見える「酵素」を取り扱い、生徒自身が生物現象・実験の本質を意識しながら実験デザインに取り組めるように教員はサポートに回る。今回は題材として、高等学校生物で学んだヒト酵素とは異なる最適環境とはたらきの関係が見え、比較的入手しやすいウミホタルを使用する。参加生徒たちにはぜひ、生物の授業学んだ知識やスキルなどをアウトプットしながら、本授業に取り組んでほしいと考えている。

「電池の反応をマクロな現象から探る」	
授業者： 八島 弘典 場所： 化学教室 ブレイクアウトルーム： 「電池」	内容： 電池における負極の金属で起きているマクロな現象からミクロな現象を探る 目標： ①マクロな現象を観察して、溶けやすい金属が負極、溶けにくい金属が正極になることを知る。 ②金属が溶けるというマクロな現象が起きているとき、金属原子が電子を失って陽イオンになるというミクロな現象が起きていることに気づく。 問いの設定： ①負極の金属と正極の金属は、どちらが電解質溶液に溶けやすいか？（実験で確認する） ②マグネシウム金属が電解質溶液に溶けるというマクロな現象が起きているとき、Mg原子にはどのような変化が起きているか？（観察の結果から探究する）

「札幌ビル街の化石探索」	
授業者： 山本 修 場所： 札幌市街巡検	内容： 札幌の地下歩行空間「チ・カ・ホ」の石灰岩や大理石は、化石の宝庫である。太古の生物の様子がこんな身近なところに存在することを知り、

ブレイクアウトルーム： 「化石」	長い地球や生物の歴史を考えてみる。 目標 ① 化石は堆積岩にしか含まれないので、地下街の壁はほとんどが石灰岩や大理石から出来ていることを知る。 ② 現在の生物と比較して、その古生物が生きていた環境や時代について考えさせる。 ③ 化石の観察を通して、生物の進化について考えさせる。 ④ ルーペを使ったスマホ写真撮影を身に着ける。(天体望遠鏡を使ってスマホ写真を撮影した授業内容の応用) 問いの設定 ① なぜ、地上の建築物にはあまり使用されず、地下やビル内に大理石が使われているのか。その成分から考えさせる。 ② 化石として地層や岩石に残るための条件を古生物の種類や生活様式から考えさせる。
------------------	---

7. 本時の計画（※各担当者の展開計画は後述）

	学習活動・生徒活動	備考
導入	各集合場所にて点呼 全体 ZOOM で概要説明 ⇒ ブレイクアウトルームに分かれる	全体統括： 福田
展開	本時の実験の趣旨・目的・手法の説明を聞く 実験開始	<ブレイクアウトルーム> ①振り子、②バネ、③ウミホタル、 ④電池、⑤化石
まとめ	考察のポイントとレポートに関する説明を確認する	

8. 本時の評価規準

	【思考力・判断力・表現力】	【知識及び技能】	【学びに向かう力・人間性など】
観点	○適切な実験計画・作業 ○データの整理・分析 ○レポートでの学術的表現 について、各実験において評価する。	○実験背景と理論の理解 ○背景と結果に基づいた考察 ○既習事項を用いた説明 について、各実験において評価する。	○活動の（メタ）振り返り ○小グループの中での協働 ○研究活動への応用の検証 について、各実験において評価する。

9. 本時の使用教具

各担当者作成のプリント、および実験器具・試薬（後日配信により閲覧可能予定）

6-1. 課題研究分野の本時について

担当者：福田 貴之

内容 「重力加速度を求める」ことを目的として、スマートフォンをスズランテープの先端に設置した振り子を作り、振り子の周期を測定する。その際、内蔵されたセンサーによって振り子の振動にともなう加速度の変化をグラフ化する。スマートフォン内蔵のセンサーの利用方法および、エクセルに書き出したデータの分析方法について学ぶとともに、誤差の生じる要因について考える。

- 目標**
- ① 10 往復にかかる時間を 10 で割って周期を求める従来の手法と比べて、スマホ振り子から抽出したデータから周期を求める手法のもつメリット・デメリットを考えさせる。
 - ② 周期および振幅が一定になりやすい振り子を制作するためにはどのような工夫が必要かを考えさせる。
 - ③ 抽出されたデータ数値を整理させ、極大点・極小点と振り子の動きの関係を理解させる。
 - ④ 実験設計において誤差を生む要因がどのようなところにあるか認識させる。

問いの設定

- ① 公式は本当に成り立つのか。(周期は振動角や重さには依存しないはずだが、実際はどうか)
- ② 現実世界で振り子を作る際、周期および振幅を一定にするためにはどうすればよいか。
- ③ センサーを用いる時のメリットと注意点は何か。

7-1. 本時の展開(課題研究分野)

	学習活動・生徒活動	教師の関わり	留意点
10:00 (導入 5分)	・小学生で習う「振り子の周期は長さのみに依存する」という理論および $T = 2\pi\sqrt{\frac{l}{g}}$ の公式を確認する ・演示用の卓上サイズの振り子で、加速度計の値をスマホの傾きに換算する考え方の説明を受ける	・「公式が完全に成り立つならば、どのような重さ・振動角を選択して実験してもいいはず。しかし本当にそうか？」と提起する	
10:05 (展開 35分)	・アプリ「Science Journal」で、3 階から V 字に吊るした約 9m 振り子において、角度や重さを変えて振動させ加速度変化をグラフ化する ・データをエクセルに書き出し、各実験において重力加速度を算出する ・教科書の理論に対して、誤差を生む要因についてディスカッションする	・振動角度が減衰していくことに気付かせる ・どうしたら減衰しないようにできるか問いかける⇒試せるものは試すよう促す	・振り子振動中の安全確保
10:45 (まとめ 5分)	現実世界での実験において、測定値に影響を与える事項について考え、ワークシートにまとめる		・今一度、実験の設計や装置を振り返ってみる

使用器具： スマホ、スズランテープ、はさみ、メジャー、重り

利用アプリケーション： Arduino Science Journal、Microsoft Excel

使用教科書： 『改訂版 物理』数研出版

6-2. 物理分野の本時について

担当者：菅原 陽

内容 「力学的エネルギーの保存則に関する実験」(バネのエネルギーと位置エネルギー)

鉛筆とプラスチックバネをひっかけてジャンプさせ、バネの伸びとジャンプする高さの関係をグラフ化し、おおむね 2 乗に比例して高くなることを体験する。試行データをエクセルに集積しながらグラフ化することで、グラフがどんどん近似直線になっていくことを体験する。

- 目標**
- ①バネの弾性エネルギーと位置エネルギーを復習したあと、実際の実験操作でデータの精度について経験させ、得たデータをグラフ化する中でバラツキがあるデータも統計処理すると比例関係に近づくことを確認する。
 - ②バネの力学的エネルギーが位置エネルギー以外に変換されていることを気付かせる。
 - ③位置エネルギー以外にどんなエネルギーに変換されたのか議論する。

7-2. 本時の展開(物理分野)

	学習活動	生徒の活動	留意点
導入 5 分	過去の事例を用いてデータ処理の比例関係について問いかける。 (ハップルの法則発見時のグラフを利用)	提示されてグラフの直線を近似した直線について感想をメモする。	現在「ハップル・ルメートルの法則」に変更されつつある。
展開 ① 5 分 ② 5 分 ③ 15 分 ④ 10 分 ⑤ 5 分	フックの法則とバネのエネルギー ① 黒板でバネの弾性エネルギーと位置エネルギーに関する要点の復習と実験により確認する。 ② 黒板に張りついた眼玉クリップに実験で使う 33mm のプラスチックバネを取出し、いくつかの重りをつけ、その変位 x に印をつける。比例することを確認し「フックの法則 ($F=1/2 k x$)」のバネ定数 k を確定する。 ③ 操作説明 バネは 1 c m 刻みで 10 c m まで伸ばし発射する。係を交代し追加のデータとするが、ジャンプ係を担った生徒の名前でデータを記入する。 ④ データをとったら、実験書に記入し値をグラフにする。縦軸は高さのグラフで、横軸は距離と距離の 2 乗のグラフの 2 種類がある。横軸が距離の 2 乗のグラフは $E=1/2 k x^2$ で直線である。 ⑤ 教師は各データをエクセルに入力	①実験書でフックの法則とバネのエネルギーの確認をする。 ②黒板でのバネ定数の測定を確認し記録する。その後緩やかに引っ張るなどして、バネ定数の値とバネの強さを体感する。 ③机上で垂直に発射練習をし、2 人で班を組み記録ジャンプ係と高さ測定を目視する係を決める。 ④データ記入とグラフ化する作業に集中し、横軸が距離の 2 乗のグラフで近似直線を傾きを出してみる。 ⑤黒板のバネ定数と比較	①フックの法則からのバネのエネルギーについて納得できているか確認する。 ②やわらかいバネのバネ定数は小さい。床も体重などで変形する板バネであり計算することを促す。 ③ジャンプ係の生徒の垂直に発射する技術が精度に影響。 ④横軸が距離の二乗のグラフはギザギザながらも直線近似が可能。傾きを出し、バネ定数と比較。 ⑤エクセル表と比較
ま と め 5 分	意見交換 バネの力学的エネルギーが位置エネルギー以外に変換されていることを確認し、位置エネルギー以外にどんなエネルギーに変換されたのか議論する。 レポート提出の支持をして終了	バネが飛ぶ瞬間と空中での浮遊状態に分けてエネルギー損失について議論する。	実験データがまとまり、平均のデータの直線性を確認し、傾きが理論値と大きく異なっていることを確認。様々な意見が出るように促す。

6-3. 生物分野の本時について

担当者：高橋 梨緒

内容 ウミホタルの発光に関わる酵素「ルシフェラーゼ」を題材とした実験デザインの実践を通して、自身の課題研究にアウトプットできる“生命科学の研究デザインに必要なスキル・考え方”を学ぶ。

目標 生徒が以下①～④のスキル・考え方を認識・理解し、自身の課題研究の課題点を考える。

- ① 実験条件（試料の状態・手順など）の均一化
- ② 半定量的実験
- ③ 人為的エラー
- ④ 既習内容のアウトプットと批判的思考による考察

問いの設定

- ① “実験条件の均一化”に関して
 - ・乾燥ウミホタルを一斉にすり潰してから各実験区に利用するのはなぜか。
 - （各実験区で使用するウミホタルの数を揃えるだけでは不十分である理由）
 - ・各実験区の発光確認時の「振る」操作の注意点は何か。
- ② “半定量的実験”に関して
 - ・本実験をより定量的に行うに考えられる工夫は何か。
- ③ “人為的エラー”に関して
 - ・反応時に既定の温度環境を維持するために考えられる工夫は何か。
- ④ “既習内容のアウトプットと批判的思考による考察”に関して
 - ・酵素反応に影響が大きい環境要因は何か。
 - ・実験を基に、最適温度・pHなどの数値を求める上で注意すべき点は何か。

7-3. 本時の展開（生物分野）

	学習活動・生徒活動	教師の関わり	留意点
10:00 導入 15分	(1) 本授業の目標の確認。 (2) ウミホタルについて知る。 (3) 乾燥ウミホタルの発光を観察。 観察後に一部の実験手順の目的を考え、理解する。	(1) 生徒への目標の共有。 (2) 以下の順に進行する。 ① ウミホタルに関する写真を見せ、その【生態】を説明。 ② ウミホタル発光動画を視聴し、【発光の仕組み】を説明。 (3) 授業プリントを参考に、以下の順に進行する。 ① プリントの配布。 ② 必要に応じてプリントへのメモを薦める ③ 実験・観察方法の説明。 ④ 発光観察後、実験手順に関する	(1) “自身の課題研究に活かしてほしい”由を強調。 (2) ① クイズ形式等で生徒を巻き込む。 ② 以下2点を強調。 ・酵素反応が関係。 ・体外発光の仕組み。 (3) ② ★ポイント①～④★でのメモを強調。 ④ “実験条件の均一化”の説明に繋げる。

		問いを提起（★ポイント①★Q1 と Q2）。解説も行う。	
10:05 展開 30 分	(1) 半定量的実験 について知る。 (2) “ウミホタル ルシフェラーゼに よる発光の最適環境 要因を調べる”ため に実験をデザイン し、実行。 実験計画・結果に 関する考察も行う。	(1) “半定量的実験” （★ポイント②★）を説明。 (2) 以下の順に進行する。 ① 酵素の反応速度に影響を与える主 要な環境要因（温度・pH など）を 生徒に思い出させる。 ② 【実験器具・試薬】の紹介。 使用上の注意を伝える。 ③ 実験デザインの開始を指示。 開始後は巡回し、適宜サポート とアドバイス。 ※“人為的エラー” （★ポイント③★）と “既習内容のアウトプットと 批判的思考による考察” （★ポイント④★）に関しては 全員に共有。	(1) 定量的実験・定性的実験の 説明後に、半定量的実験の 説明へ。 ※ 半定量的実験の結果 記録方法も説明。 （本実験にも応用可） (2) ① ・導入での【生態】や 【発光の仕組み】を 思い出させ、自発的に 気づくよう繋げる。 ・【実験計画・結果・考察】を 考える際の注目点 （プリント記載）を伝える。 ② 怪我につながる注意点を重 点的に説明。 ③ ※ ポイント③に関しては 最適温度に関する実験時、 ポイント④に関しては 考察記載時に指摘予定。
10:45 （ま とめ 5 分）	展開時の実験を 振り返りながら、 プリント＜本授業の まとめ＞の2点の 問いに関して考え、 レポートに記載。	まず、プリント★ポイントのまとめ★ 記載の①～④について生徒とともに 振り返る。 その後、巡回し、2点の問いに関して 適宜アドバイスを行う。	特に2つ目の問いに関する 生徒提案に関しては、 ★ポイントのまとめ★の ①～④のどれにあてはまるか も記載するように生徒に指示 する。

6-4. 化学分野の本時について

担当者：八島 弘典

内容 電池における負極の金属で起きているマクロな現象からミクロな現象を探る

- 目標**
- ① マクロな現象を観察して、溶けやすい金属が負極、溶けにくい金属が正極になることを知る。
 - ② 金属が溶けるというマクロな現象が起きているとき、金属原子が電子を失って陽イオンになるというミクロな現象が起きていることに気づく。① 10 往復にかかる時間を 10 で割って周期を求める従来の手法と比べて、スマホ振り子から抽出したデータから周期を求める手法のもつメリット・デメリットを考えさせる。

問いの設定

- ①負極の金属と正極の金属は、どちらが電解質溶液に溶けやすいか？（実験で確認する）
- ②マグネシウム金属が電解質溶液に溶けるというマクロな現象が起きているとき、Mg 原子にはどのような変化が起きているか？（観察の結果から探究する）

7-4. 本時の展開(化学分野)

	学習活動・生徒活動	教師の関わり	留意点
導入 5 分	・マグネシウムと銅を塩酸に浸すと電池ができることを説明する。 ・マグネシウムと銅は、どちらが負極？正極？、また負極・正極は金属のどのような性質で決まるのかを予想する。		
展開 35 分	実験 <マグネシウムと銅は、どちらが負極？正極？> ①電極（マグネシウム，銅）に電子メロディを接続して，音を鳴らす。 ②電極（マグネシウム，銅）に検流計，を接続して電池の＋，－を調べる。 結果：マグネシウムが負極，銅が正極 <電解質溶液に溶けやすいのは負極のマグネシウムか？正極の銅か？> ・塩酸が入った 2 本の試験管に，それぞれマグネシウムと銅を加え，金属の溶けやすさを調べる。 結果：負極のマグネシウムが電解質溶液に溶けやすい 考察 <負極のマグネシウム金属が塩酸に溶けるととき，Mg 原子はどのように変化しているか？>	・電子メロディの導線（赤色）を電池の＋，導線（黒色）を電池の－に接続すると電子メロディが鳴る。 ・検流計の使い方について説明する。 「マクロな現象」 ・負極のマグネシウムが溶解	・電子メロディの音を鳴らすことで，電池ができていることを実感させる。 ・リード線先端のステンレス針に付着している塩酸を水道水で洗い流す。

	<課題> 負極，正極ともマグネシウムを用いて，電池（濃淡電池）をつくることができる。この電池をつくり，電圧を測定することで電池ができていることを確認する。	「ミクロな現象」 ・負極から電子 e^- が発生 ➡ Mg 原子から電子 e^- が発生 ➡ $Mg \rightarrow Mg^{2+} + 2e^-$ ・電圧値は最高値を記入するよう指示 ・時間的余裕があれば，電子メロディが鳴るように工夫させる。 （リード線先端のステンレス針をマグネシウムにしっかり押しつける。またマグネシウム量を増やす。）	・ $Mg \rightarrow Mg^{++} + e^-$ もほぼ正解として生徒を称賛！するよう努める。 ・適切なアドバイスで，達成感を演出する。 ・リード線先端のステンレス針に付着している塩酸を水道水で洗い流す。
まとめ 5分	授業を振り返って，まとめ（分かったこと）や感想をレポートに記述する。		

6-5. 地学分野の本時について

担当者：山本 修

内容 札幌の地下歩行空間「チ・カ・ホ」の石灰岩や大理石は、化石の宝庫である。太古の生物の様子がこんな身近なところに存在することを知り、岩石と化石の関係を考えてみる。

- 目標**
- ① 化石は堆積岩にしか含まれないので、地下街の壁はほとんどが石灰岩や大理石から出来ていることを知る。
 - ② 現在の生物と比較して、その古生物が生きていた環境や時代について考えさせる。
 - ③ 化石の観察を通して、生物の進化について考えさせる。
 - ④ ルーペを使ったスマホ写真撮影技術を身に着ける。(天体望遠鏡を使ってスマホ写真を撮影した授業内容の応用)

問いの設定

- ① なぜ、大理石は地上の建築物にはあまり使用されず、地下やビル内で使われているのか。その成分から考えさせる。
- ② 化石から生物の歴史やその生活様式から当時の地球環境を考えさせる。

7-5. 本時の展開(地学分野)

	学習活動・生徒活動	教師の関わり	留意点
10:00 (導入 5分)	- 札幌駅前通り地下歩行空間の4番出口階段横の広場に集合(階段の横に大理石で囲まれた広い空間ある) - 壁一面の模様の中に化石(アンモナイトなど)があることを知る	- 本時の概要を説明する - 実習プリントを配付する - 今まで理科で学習してきた知識を引き出す	まずは、何気なく通っているチカホにこんな場所があることに気付かせる
10:05 (展開 35分)	①4番出口にて <何故、ビル街の石材に深成岩や大理石が使われるのか?> - 深成岩と大理石の標本を観察し、目の前にある壁がどちらで出来ているかを考える。 - 深成岩のでき方と大理石のでき方から、石材に使われる理由を理解する。 <化石が含まれるのは深成岩、大理石のどちらか?> - 深成岩のでき方と大理石のでき方の違いから、化石が含まれるのは大理石であることを理解する <化石になりやすいのは、どんな生物やどんな部位か?> - アンモナイトとベレムナイトを観察する	- 花崗岩とはんれい岩、石灰岩と大理石の4つの岩石を観察させる - 深成岩と大理石(変成岩)のでき方の説明をする - 深成岩はマグマが地下深くで、ゆっくり冷えてできた火成岩 - 大理石は、堆積岩の石灰岩が熱変成を受けてできた変成岩であることから深成岩には化石は含まれないことを理解させる - アンモナイトとベレムナイトがどんな生物(軟	- ビル街の石材によく使われるのは、主に火成岩である深成岩と堆積岩である石灰岩が変成を受けた大理石である - どちらも結晶質なので見栄えが良い - ルーペを使うと分かりやすい - 化石の定義についても少し触れる - 化石は静かに堆積した地層内で見つかる - 石灰岩や大理石の主成分は炭酸カルシ

	・その生物が棲んでいた環境や体のつくりから考える。 ・周りの石材に注意しながら、次のポイントまで移動する ②ギャラリーステラにて <化石を探してみよう！> ・前半の授業で得た知識を元に、アンモナイトやベレムナイト以外の化石を探す ・次のポイントへ移動する ③13番出口付近 <柱に見られる化石の写真をスマホやタブレットで撮影してみよう！> ・通行人などの邪魔にならないように写真を撮る ・4番出口の岩石や化石と同じであることから、どのようなことが言えるのか考える ④北洋銀行入り口 <花崗岩を観察し、大理石との違いを確認しよう！> ・花崗岩でできた壁面を観察し、化石が含まれていないことを確認する ・ざくろ石(ガーネット)をルーペで観察し、拡大写真をスマホあるいはタブレットで撮る	体動物の頭足類)に分類されるのかを説明する ・移動中にもチカホの石材に目を向けさせる、化石を含む石材はない ・ここには巻貝(腹足類)と二枚貝(斧足類)の化石があり、どちらも石灰質の殻を持っているに気付かせる ・ここでは、アンモナイトやベレムナイトの化石が見られることから、4番出口の大理石との時代的環境的な類似点を考えさせる ・深成岩である花崗岩は等粒状組織で、結晶が大きく美しいことに気付かせる	ウムである ・移動中は音声と映像は off にする ・ギャラリーステラは、休憩場所や待ち合わせ場所になる場合もあるので Zoom 配信には注意を払う ・移動中は音声と映像は off にする ・アンモナイトは中生代の示準化石である ・これらの元になった石灰岩が同じような時代に同じような環境で形成されたことを理解させる ・ざくろ石はガーネットとも言われ、一月の誕生石である ・化石だけでなく宝石も発見できる ・大理石も美しいが炭酸カルシウムで出来ているため、外壁には使えない
10:45 (まとめ 5分)	実習プリントを完成させ後日提出する	・科学的にアウトプットする力を高めることが出来たか、自問自答させる	・覚えるのではなく、知識を取り出して考える力をつけるのが科学実験である

上記以外に、札幌には次のような場所でも化石がみられる。

- ① オーロラタウン・オーロラスクエア …… アンモナイトやベレムナイト(頭足類)
- ② 東豊線札幌駅と南北線駅地下連絡通路 …… 大型有孔虫、ウニ類、ウミユリ
- ③ 北海道建設会館 ※見学者名簿に名前を記載すること
 - 外壁 …… 美しい青色の閃光を放つ月長石を含む深成岩
 - 玄関ホール壁 …… ベレムナイトやウミユリ

参考文献：北海道新聞社「さっぽろビル街の化石めぐり」など

公開授業 英語科 指導案

日 時 : 2022 年 8 月 27 日(土) 10:00-10:50

実施場所: Co-Tan3 教室

対象クラス: 中学 2 年 3 組・4 組(13 名)

授 業 者 : 坂元 陸也

1. 授業名・単元名

【NT】イラストリテリングを活用したアウトプット活動の実践

2. 単元について（内容、単元の目標、評価方法など）

本校では検定教科書New Treasure Stage2 Third Edition を使用している。Lesson4-2 は配当時間2時間で、1時間目のところでは 57 ページ“Key Point”では不定詞の副詞用法の文法事項を解説済みである。本時の授業では副詞用法の不定詞の定着を行う。本時の授業は、56 ページに該当する。

観点	【知識・技能】	【思考・判断・表現】	【主体的に学習に取り組む態度】
規 準	【読むこと】 副詞用法の意味や働きの理解を基に、英文の概要を読み取る技能を身に付けている。 (技能) 【話すこと（発表）】 リテリングにおいて既習事項の文法や副詞用法などを用いて話す技能を身に付けている。(技能)	【話すこと（アクティビティ）】 イラストをもとにリテリングをする際に相手に伝わるような話し方で行っている。 【書くこと】 「～するために」という英文を作成することができる。	【聞くこと（アクティビティ）】 リテリングしている人の英文の内容を捉え、理解しようとしている。 【話すこと（発表）】 リテリングにおいてイラストをもとに沈黙することなく話そうとしている。

3. 単元の計画

コマ	授業内容	宿題	小テスト・クイズ
1	L4-1 KP New Words, KP, Scene 内容確認	L4-1 課題冊子	
2	L4-1 Scene, リテリング	L4-3 ノート作成	Kahoot!L4-1 復習クイズ
3	L4-3 KP New Words, KP, Scene 内容確認	L4-3 課題冊子	L4-1 セクションテスト
4	L4-3 Scene, リテリング	L4-2 ノート作成	Kahoot!L4-3 復習クイズ
5	L4-2 KP New Words, KP, Scene 内容確認	L4-2 課題冊子	L4-3 セクションテスト
6	L4-2 Scene, リテリング		Kahoot!L4-2 復習クイズ
7	L4 Read ①		L4-2 セクションテスト
8	L4 Read ②		
9	L4 Read ③ & Word Square		
10	レッスンテスト	課題冊子提出	

4. 生徒観

本校の中学 2 年生は 6 クラス 204 名おり、うち 2 クラスは成績上位者が所属する主に難関国公立大学への進学を目指す SP コースである。ほか 4 クラスは立命館大学及び立命館アジア太平洋大学、他大学への進学を目指す一貫コースである。一貫コースでは 2 クラスを 3 つに分けて授業を行っており、習熟度の高い 2 クラスとそうでない 1 クラスで分かれている。受け持っている 2 年 3・4 組の生徒たちは後者の英語習得に苦勞している集団である。学習内容の定着を図るためにこのクラスは少人数で編成されている。英語学習に対して苦手意識を持っている生徒や、勉強はしているものの小テストや定期テストにおける得点につながらないという生徒もいる。また積極的には発言しないものの、教員側からの発問には応じ、アクティビティに関しては慣れてくれば楽しんで取り組む生徒もいる。

文法への理解に関しては、1 年次の単語や文法事項が定着しておらず、新出文法を学ぶ際には既習事項の確認を丁寧に行わないといけない現状にある。ただ、不明点は不明なままにせず、その場で質問できる生徒もいるため、その生徒たちを中心に「Let's try anyway.(とにかくやってみる)」という姿勢を大切に、英語学習に対して意欲的に自ら学ぶことができる雰囲気づくりができています。

5. 指導上の留意点

デバイス・ICT ツールの活用必要性に応じて、授業内ではデバイスを使用する場面があるもののこの集団に対しては敢えてノート作成を徹底している。ノート作成は宿題として課しているが、予習としての要素も含み、どんな文法事項を習うのか、どういった英文が書かれているのかを意識しながら取り組ませている。また、新出単語はオレンジ色のペンで文中に書かせ、復習の際に赤シートで隠して練習できるよう工夫をしている。授業内においては、ノートに必要事項のメモをとるだけでなく、英単語や英文に関連した簡単なイラスト（絵や図）を描かせることにより文法理解に対する記憶の結びつき（二重符号化理論）を意識したノート作成を心がけるようアプローチをしている。生徒に対する声掛けとしては、上手くできたら褒める、間違えても否定しないことを意識し、いかにしてモチベーションを維持し続けられるかを常に考えながら行っている。また、生徒の個々の能力に応じた発問を意識している。

6. 本時について

前時では、副詞用法の不定詞を解説し、文法事項は確認済みである。既習事項である名詞用法、形容詞用法と区別しながら学習した。in order to, so as to も併せて確認済みである。また、テキスト 56 ページの Scene の会話にも触れ、どのような内容が書かれているかを確認している。本時では前時の復習を導入としてkahoot!というクイズツールを用いて行い、副詞用法の不定詞の文法事項を再確認する。その後、アクティビティとしてイラストリテリングを行う。このクラスにおいてリテリングは難易度が高いものであるが、日本語で内容を確認したあとに、イラストをヒントにして登場人物の Yumi にフォーカスを当てたりテリングに挑戦することを目標にする。また、ライティングアクティビティとして Yumi が何のためにニューヨークに行くのかを<to + 動詞の原形 (～するために)>を使用した英文を考えさせ書かせることも目標とする。

7. 本時の計画

	学習活動・生徒活動	教師の関り	留意点
導入 (7 分)	前時の復習（副詞用法の不定詞） ・文法事項を確認する。 名詞用法・形容詞用法も混ぜて出題する。 (kahoot を使用する)	ポイントをおさえながら相互的に確認をする。	予め kahoot につないでスタンバイさせる kahoot の解答の際に文法事項の解説を行う。
展開 (38 分)	【内容確認】(8 分) ・ Scene の文章を区切りながら教員の後にリピートさせ、練習する。 ・ Scene のコーラスリーディング 1 回目 Level 1, 2 回目 Level2, 3 回目 Level 3 【リテリングに挑戦！】(20 分) ・Yumi にフォーカスを当てた Scene の内容のイラストカードを提示し、アクティビティの内容を解説する。同時に各カードに描かれている絵の内容を日本語で確認し、事前に確認すべきフレーズ等はメモをさせる。(7 分) ・英語でリテリングに挑戦する。 ※カードは①～③まで	日本語→英語→リピートで内容を把握しながら行う。 Scene の穴埋めをしながら読ませる。教師も生徒と一緒に行う。 カード Level1~3 キーワードをおさえられるように意識させる。使える単語やフレーズ等は板書などで確認する。 ペアワークの際に机間	細かく区切って確認しながらリピートさせる。つまづいているところは繰り返し練習する。 教師が読む際はゆっくり穴埋めを考えるふりをしながらサポートもかねて行う。 自分の言葉で話させる。適宜テキストを開かせ、内容を思い出させる。 Yumi の視点でリテリングすることをおさえる。 聞き手は相手が何を言っているのかを相手の

	じゃんけんで順番を決める。 1 回目勝った人 2 回目負けた人 ペアを変えて時間を見ながら 2～3 回程度行う。 (10 分) ・数人に前に出てきて発表させる。 (3 分) 【Writing Activity】(10 分) ・ ☆カードを使用してユミが何のために NY に行くのかを考えさせ、ロイロノートのカードに取り組ませる。	巡視を行う。回る中でイラストのリテリングに詰まっている生徒がいればヒントをあげる。リテリングのフィードバックをその場で与える。 イラストをヒントに考えさせてもいいが、イラスト以外のオリジナルで作らせてもよい。生徒から単語のスペルを聞かれたら板書で提示する。	目を見て聞くよう促す。話し手はなるべく相手の目を見ながら、画面を相手に見せながら話すよう促す。 タイピングではなく、手書きでデバイスに書かせる。単語に詰まっている生徒はテキストを参考にしてもよい。
まとめ (5 分)	・書き終わったカードは「提出箱」に提出させ、(時間があれば)全員のカードを披露しフィードバックをする。 (時間があれば)		時間がなければ、数人の発表に留める。間に合わなかった人は後程回収。

公開授業 保健体育科 指導案

日 時 : 2022 年 8 月 27 日(土) 10:00-10:50

実施場所: アリーナ

対象クラス: 高校 3 年 A 組・C 組 授業選択者(18名)

授 業 者 : 工藤良太・河邊清孝

授業協力者: 斎藤雄大(HOKKAIDO ADAPTIVE SPORTS 代表)

1. 授業名・単元名

【スポーツと健康 I・II】「車いすバスケットボール」

～障がい者スポーツ（以下、パラスポーツ）を理解・実践し、

私たちの心や周りの環境にある「バリア」を取り除こう！！～

2. 単元について（内容、単元の目標、評価方法など）

(1) 単元の目標

車いすバスケットボール(以下、車いすバスケ)を理解し実践することで、共生社会の実現へ向けて、互いの違いを受け入れ、多様性を尊重し行動することが大切であるということを理解できるようにする。

(2) 設定の理由

本講座では、立命館大学スポーツ健康科学部への進学を目指す生徒を対象として、大学での学びへつながられるように能動的な学びを意識し単元設定を行っている。本単元では、車いすバスケットボールの実践的な活動を通して、多角的・多面的な視点による奥深い学びによって「スポーツを通じた共生社会の実現」について理解することができるのではないかと考えた。また、他競技・他種目に比べ、生徒全員が体育の単元として通常のバスケットボールの実技を行った経験があるため、車いすバスケならではの特徴的なルールや用具の工夫について、通常のバスケットボールと比較がしやすいと考えた。

(3) 単元観

2021年夏に「東京」、2022年冬には「北京」でそれぞれパラリンピックが開催された。多様性を認め、誰もが個性や能力を発揮し活躍できる公正な機会が与えられている場で、障がいとともに生きるアスリートたちが創意工夫を凝らして限界に挑む姿に、パラスポーツがもつ可能性、そして価値やその意義について再認識することができた。

パラスポーツには「障がいの種類や程度に応じて、ルールや用具をプレイヤーに合わせ工夫して実施することにより、障がいとともに生きる人もそうではない人も『共』に実践し楽しめる」という特徴があり、「互いの違いを受け入れ、多様性を尊重しあう大切さ」を学ぶことのできる優れたスポーツカテゴリーの一つであるといえる。障がいの有無に限らず、誰もが楽しむことができるスポーツとして、スポーツ実施の裾野を広げることができる可能性を持っており、パラスポーツを多様な人が一緒に楽しむことで、自然な形で障がいと共に生きる人や体力がない人への理解を深めていくことができるなどの効果も期待できる。

我が国においては「障がいとともに生きる人＝弱者」という認識が未だ根強い。相手への無理解や偏見などといった観念的な障壁は、障がいとともに生きる人たちを社会からエク

クルージョンする形となり、「障がいとともに生きる人が過ごしにくい社会」が長年にわたって作られてきた。

共生社会とは、人格と個性を相互に尊重し支え合い、人々の多様な在り方を相互に認め合うことのできる全員参加型の社会である。パラスポーツや社会的障壁への理解をひとつのきっかけとして、一人ひとりが共生社会について考え、理解し行動を起こすことにより「障がいとともに生きる人が過ごしにくい社会」から「誰もが、どこでも、どんな時でも心地よく生きていくことのできるインクルーシブな社会」へ変化させていくことが可能であることを、本単元を通して理解できるようにする。

(4) 評価規準(評価方法は、レポート課題)

観 点	思考・表現・判断	知識・技能	主体的に学習に取り組む態度
規 準	● 共生社会について個人の考えを述べることができ、他者の意見と照らし合わせて整理し、説明できる ● 学習課題に応じた取り組み方を工夫している	● 共生社会の実現のために必要な知識や行動について理解し、日常生活の課題解決に役立つ知識を身につけている ● 車いすバスケの特性や成り立ち、技術の名称や行い方、試合の行い方を理解している。 ● 車いすバスケの特性に応じて、ゲームを展開するための基本的な技能や仲間と連携した動きを身につけている	● 共生社会の実現について関心をもち、仲間と協力して資料を集め、意見交換をするなど、課題を見つけ意欲的に学習しようとしている

3. 単元の計画

時間	学習内容
1	(座学)パラリンピック・パラスポーツを知ろう！
2	(実技)「ブラインドラン」 ～「目の見えない世界とは」、ちょっとしたものが障害に。
3	(座学)パラスポーツ・パラアスリートの現状とこれから
4-1	(実技)「車いすバスケ」 ～競技用車いすの特性を知ろう
4-2	(実技)「車いすバスケ」 ～操作方法を覚え、ミニゲームを楽しもう(シャーク)
5	(座学)心のバリアフリー ～障がいの社会モデル
6-1	(実技)「車いすバスケ」 ～仲間と協力し、戦略的にミニゲームを進めよう(王様ラグビー)
6-2	(実技)「車いすバスケ」 ～入門編(競技特性・ルール)・技術実践(ドリブル・シュート)
7-1	(実技)「車いすバスケ」 ～実際に試合をやってみよう
7-2	(実技)「車いすバスケ」 ～戦略的に試合を進めよう① ～スクリーンプレー
8	(実技)「車いすバスケ」 ～戦略的に試合を進めよう② ～ピックアンドロール
9	(座学)まとめ 「共生社会の実現に必要なこと」 ～車いすバスケの実践を通して

(授業時間について、4・6・7回目は100分、それ以外は50分)

4. 生徒観

(1) 受講生徒について

本校は立命館大学の付属校であり、本講座は立命館大学スポーツ健康科学部への進学を目指す生徒を対象として設置されている選択制の講座である。構成は3年生18名(男子15名、女子3名)で男女合同での実施である。全員がいずれかの本校運動クラブ、もしくは外部のチームに所属し選手またはマネージャーとして活動しており、運動意欲、健康への意識は高い。授業には積極的に取り組み、相互のコミュニケーションも充実しているため各時の目標への達成度は総じて高い。

(2) 生徒の実態について

本校全生徒を対象とした「共生社会およびパラスポーツ」に対する実態調査の結果の中から、本講座受講生徒の実態は以下の通りである。

パラスポーツについて、全員が一度は見たことはあるが、取り組んだことがある生徒は少ない。障がいと共に生きる人へ対するイメージは「頑張っている」や「苦勞している」などの意見が多く、なかには「避けてしまっている」という否定的な意見もみられた。共生社会については、ほとんどの生徒が実現する必要があると答えており、「障がいと共に生きる人への理解を深めて差別しない」や「自分とは異なる文化や環境で生きている人達への偏見を無くすこと」などの回答があった。

以上の調査結果から、「自分と異なる文化や環境で生きている人達への偏見」とはどのようなものであるか。また、その偏見を取り除くためにはどのようなことが必要であり、自分には何ができるのか。などについて理解させ、共に考えていく必要がある。

5. 指導上の留意点

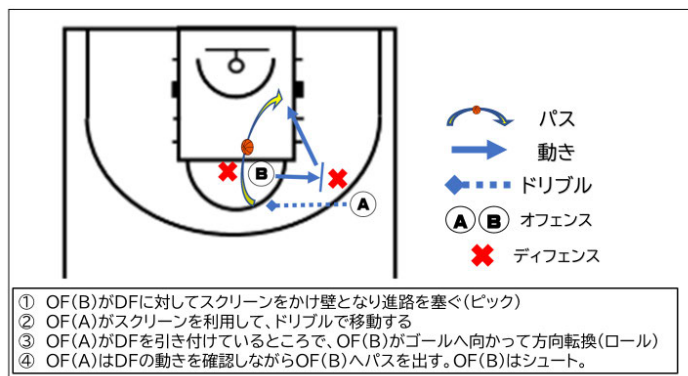
本講座は学校設置科目として、普段の保健体育の授業とは異なり柔軟な単元の設定が可能であり、大学での学びを意識した単元の設定を行っている。本単元では、主にパラスポーツの実践を通して、共生社会について考え、課題解決へ向けて能動的に行動できるようになることを目標にしている。そのため、実技と座学を織り交ぜながら生徒一人ひとりが課題発見力を身につけ、自分の意見を持つことの大切さに気付くことができるように指導していく。座学では、障がいとともに生きる人の現状や抱える課題、心のバリアフリーなどを学び、課題を発見し、多角的な視点で思考し判断するとともに、自らの考えを他者に伝えたり、将来的に実際に行動したりすることができるように指導していく。実技では、車いすバスケットと通常のバスケットボールとのゲーム性の違いなどを発見し、チームの課題解決へ向けて主体的かつ能動的に取り組んでいけるように指導していく。また、運動が得意な生徒と苦手な生徒が教え合い、仲間と協力し励まし合いながら授業を進めていく中で、意欲の向上を図り、皆が全力で身体表現ができるような声かけを多くしていくとともに、車いすという普段の授業とは異なる環境となるため、安全面に十分配慮し指導していく。

6. 本時について(8/9 回)

本時では、車いすを有効的に使用した「ピックアンドロール」を習得し、オフザボールでもプレーでチームへ貢献することができるようにする。また、前回に引き続き主体的・積極的に参加しチーム内で連携を深め、戦略的にゲームを進めていくことができるようにする。

※ピックアンドロール(練習方法、図参考)

ボールを持った選手をガードしているディフェンダーに対してスクリーンを仕掛け、それを利用した後に、スクリーンの“壁”になった選手が方向転換し、空いたスペースへ走り込んでボールを受けるプレー



7. 本時の計画

	学習内容・活動	指導上の留意点	評価基準
導入 (8分)	I. あいさつ、出欠(健康状態)確認 II. 前時の内容の振り返り 【教師からの発問】 前回はピックアップアンドロールからレイアップシュートをゲームで実現するが目標。 ①実現できたか ②もし出来ていなければどのようなことが課題としてあげられるか 《予想される生徒の反応》 ● スクリーンが上手くいかず、進路を塞ぎきれなかった。 ● スクリーンは上手くいったが、シュートをカットされてしまった。 ● 車いすの操作が上手くいかず、空いたスペースに入ることができなかった	☆ 欠席者、見学者の確認をする ☆ 前時における課題について生徒へ発問する	
	III. 準備運動(車いす使用) ● 前進・後進(直進・蛇行) ● 準備運動後、各グループに分かれる	☆ 安全面に配慮させる ☆ ゲームが各5人での対戦のため、前時で4グループ(5人2グループ、4人2グループ)作成済。	
展開 (35分)	IV. 本時のねらいの確認 「車いすを有効的に使用した「ピックアップアンドロール」を習得し、オフザボールでもプレーでチームへ貢献することができるようにする」	☆ 既習内容の確認を行いながら、活動内容を把握し見通しが持てるように説明する	
	V. 「ピックアップアンドロールからのパス、シュート」について各グループで討議および確認を行う ● 前時の振り返りの内容を活かしてプレー成功のために必要なポイントを各自整理する ● ホワイトボードを使用し、プレイヤーの動きを視覚的に確認する	☆ プレー成功のために必要なポイントについて伝え、前回での課題を踏まえながら、ポイントを整理するように伝える 【気付いてほしいポイントの例】 ✓ ゲーム内では5名中2名がピック～のプレーに関わる。それ以外の3名がピック～のプレーが成功するように、どのようにスペースを生み出すか(オフザボールでの動き) ✓ プレイヤー同士の距離感や動くタイミングを合わせることで成功率は高まる	◆ ピックアップアンドロールの技術の順番などを適切に理解し、動きを身につけている ◆ 技術を身につけるための運動の行い方のポイントを見つけている ◆ 自己やチームの課題を見つけている
	● 「ピックアップアンドロールからのパス、シュート」をグループごとに実際に確認を行う ● グループごとに各1ゴールエリアを使用し練習する ● グループ内でお互いに動きを確認する。	☆ 自分や友達の良さや問題点を交流することで、良い動きに気づかせる。※良い例があればモデリングを示し、参考にさせる ☆ グループごとに分かれ、それぞれ確認させる ☆ 個人の技能、グループの動きを確認し、プレーの確認中でもホワイトボードなどを効果的に使用し課題の共有を行うように声掛けを行う	

	VI. ゲームを行う ● ゲーム時間 5 分で 3 試合行う 【対戦順】 ① A vs B ② C vs D ③ 勝ち vs 勝ち	◇ ゲームを行っていないグループに対しては、観戦しながらも自グループの課題や他グループの参考になる部分などの共有をグループ内で行うように伝える ◇ 本時で学んだ技術およびプレーを積極的に取り入れ、戦略的かつ協力的にゲームを展開させられるように声がけを行う	◆ 適切に車いすを操作し、オフザボール時に仲間と連携して動くことができる ◆ ルールを適切に理解し、ゲームを進めることができる。
まとめ (7分)	VII. 本時のまとめ ● 学習の成果や課題などのまとめを発表する	◇ 以下の 2 点について発問を行う ① 本時のねらいへの達成度やゲーム内での成果について ② 車いすバスケの取り組みを通して「共生社会の実現」に役立てられることはあるか。あるとすれば、それはどのようなことか。 ◇ 代表者を指名し、発表させる	◆ 車いすバスケを通して学んだ要素から、共生社会の実現にはどのようなことが必要であるかについて考察し、個人の考えを述べることができる
	① 本時のねらいへの達成度やゲーム内での成果について 【教師からの発問】 ゲームをやってみてピックアンドロールのプレーは出せたか。 ➢ (出せた場合) なぜ出せたと思うか。 ➢ (出せなかった場合) なぜ出せなかったと思うか。改善できるポイントはあるか。 《予想される生徒の反応》 ➢ (出せた場合) スクリーンを上手くかけられたため、スペースが生まれて良いパスを出す(受ける)ことができた。など ➢ (出せなかった場合) スクリーンを上手くかけることができず進路を塞げなかった。空いたスペースに味方のオフェンスが残ってしまい、ディフェンスが寄ってしまったため上手くパスをつなぐことができなかった。		
	② 車いすバスケの取り組みを通して「共生社会の実現」に役立てられることはあるか。あるとすれば、それはどのようなことか。 (次時へ向けた発展的課題)例えば、バスケの上手・下手という部分もそれぞれの多様性であり、その状況を認めどのように互いに尊重し行動していくことができるのか。また、自分が良かれと思ったプレーがもしかすると味方の意思に反するプレーになっているかもしれない。世の中にもそのような場面はたくさんあり、自分の思い通りにだけ事が運ぶということは少ない。もし思い通りに進んでいたら、自分の知らない所で誰かの負担になってしまっているのかもしれない。相手の気持ちを互いに尊重し、何を想い、考えているかを考えることが大切である。 《予想される生徒の反応》 ➢ 良いプレーをするためにはチームメイトとの意思疎通が大切なので、互いに尊重して足りない部分を補い合うことが大切だ。など		
	● 教師(講師)の評価 ● 次時の説明を聞く ● 集合、あいさつ	◇ 次時の確認をさせる	

8. 本時の評価規準(評価方法は、レポート課題)

観点	思考・表現・判断	知識・技能	主体的に学習に取り組む態度
規 準	●技術を身につけるための運動の行い方のポイントを見つけている ●自己やチームの課題を見つけ、仲間と協力する場面で、分担した役割に応じた協力の仕方を身に付けている ●学習した安全上の留意点を他の練習場面や試合場面に当てはめている	●共生社会の実現のために必要な知識や行動について理解し、日常生活の課題解決に役立つ知識を身につけている。 ●車いすバスケットを通して学んだ要素から、共生社会の実現にはどのようなことが必要であるかについて考察し、個人の考えを述べることができる ●車いすバスケットの特性や成り立ち、技術の名称や行い方、試合の行い方を理解している。 ●適切に車いすを操作し、ピックアンドロールの動きを身につけたり、オフザボール時に仲間と連携して動くことができる ●ルールを適切に理解し、ゲームを進めることができる。	●車いすバスケットボールの学習に積極的に取り組もうとしている ●分担した役割を果たそうとしている ●作戦などについての話し合いに参加しようとしている ●仲間の学習を援助しようとしている ●健康・安全に留意している

9. 本時の使用教材

- 競技用車いす 20 台
- ホワイトボード 1 台
- グループ討議用ホワイトボード 4 台
- 電子ホイッスル 1 個
- 電子タイマー 1 台
- ビブス 3 色、各色 5 枚、計 15 枚

公開授業 司法講座 指導案

日時:2022 年 8 月 27 日(土) 10:00-10:50

実施場所:コタン I

対象クラス:3 年 B 組 司法講座選択者(23 名)

授業者:及川貴夫, 石塚 慶如(弁護士:札幌弁護士会所属)

1、授業名 司法講座

2、単元について(内容、単元の目標、評価基準)

弁護士による講座第 1 回目(外部講座等に関する説明は別資料参照)

- ・法律の合憲性を争う裁判を事例にし,違憲立法審査権や人権,憲法の条文の解釈などの理解を深める。
- ・判決文は,学習指導要領が掲げる3観点の応用教材であり,中等教育で身に付けた資質・能力の活用を学ぶ

3、単元の計画

時間	学習内容
1・2 (7/1)	違憲立法審査権について(石塚弁護士) 「受信契約締結承諾等請求事件」を事例に,基本知識の確認,判決文の読み方について学ぶ
3 (7/13)	「平成 25(オ)1079 損害賠償請求事件(最高裁判所大法廷)」※再婚禁止期間 憲法 14 条 1 項, 24 条 2 項についての解釈
4・5 (7/15)	「平成 31(ワ)267 損害賠償請求事件(札幌地裁)」※同性婚 「平成 31 年(ワ)第 1258 号損害賠償請求事件(大阪地裁)」判決文を比較し,争点の整理
6 (8/24)	憲法 14 条 1 項(法の下での平等)について,石塚弁護士による解説
7※本時 (8/27)	・婚姻に関する民法の諸規定が,憲法 14 条違反になるのかどうか。 ・判決文を基に,各自の意見をまとめ,論理的に議論する。

4、生徒観

主に立命館大学の進学を目指すコース(JB コース)に所属する生徒である。たいていの生徒が法学に興味をいだいている。生徒の雰囲気は,真面目で積極的に議論に参加する姿勢がある。

5、指導上の留意点

- ・現在の日本で起きている繊細な問題を扱うので,様々な政治的な立場や意見を持つ生徒がいることを前提として,ある思想を押し付けるような発言・発問にならないように留意する。
- ・判決文は,独特な言い回しをするので,文の要旨がつかめるように,ある程度共に読み合わせるなど,生徒の理解度を注意深く観察する。

6、本時について

- ・同性婚判決（札幌地裁と大阪地裁）を比較し、婚姻に関する規定（民法や戸籍法）が憲法14条1項（平等権）に、違反するのか検討する。
- ・異性愛者に認められる権利が同性愛者に認められていないことについて、具体的な差異を比較しながら、検討し、グループ（1グループ3もしくは4名で、7グループ）で議論し、結論（違反する・違反しない）を発表する。
- ・グループでは、各自事前に準備してきた資料（ワークシート）を基に議論し、基本的には全会一致を目指す。
- ・今回の議論には正解はないため、グループ討議では、結論（違反する・違反しない）よりも、その結論に至った理由を重視し、代表者による発表においては、理由が論理的であることを求める。

7、本時の計画

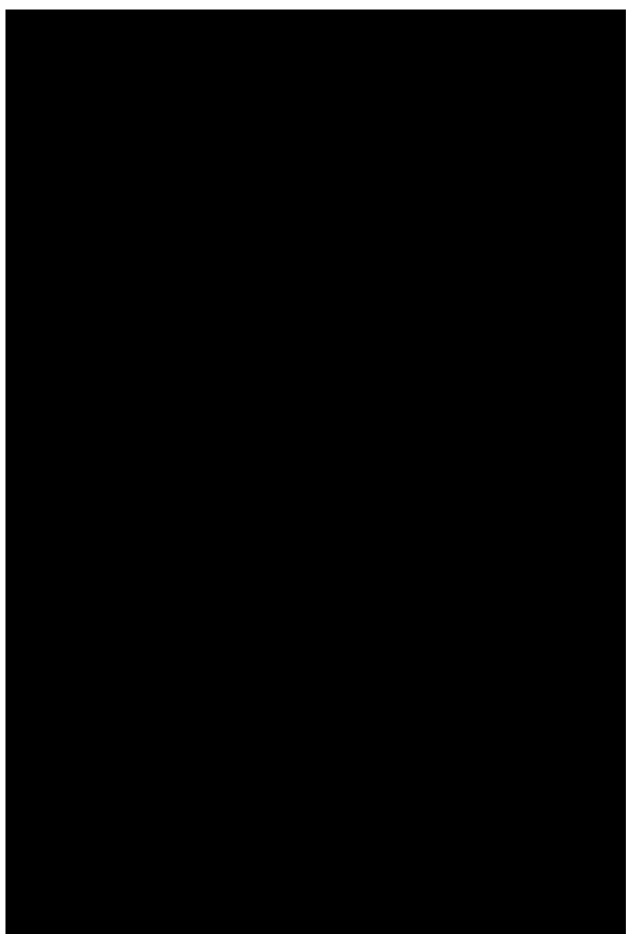
	学習活動・生徒活動	指導上の留意点
導入 10分	本日の確認（目標や時間配分） ☐ グループの結論は全会一致を目指す ☐ 理由についての説明は、 ・区別の目的の正当性、区別の手段の正当性を明確に示すこと	
展開 20分	各グループでの議論 （～5分）を目途に各自の意見を発表 （～15分）グループの意見議論 （～20分）グループの意見まとめ	・意見が早々にまとまった班には、視点の不足を指摘する。 ・意見がまとまらない班には、発表時にそれぞれの意見の人数を発表し、出てきた観点の発表を促す。
まとめ 20分	発表（各班1分～2分程度） 石塚弁護士によるまとめ	

【研究集会記念講演】



「教科書には書かれていない考える力」

すずい たかゆき
鈴井 貴之氏



プロフィール:

北海道赤平市出身・在住。大泉洋、安田顕ら TEAM NACS が所属する CREATIVE OFFICE CUE の創業者。現会長。大学在籍中に演劇の世界に入り、1990 年に劇団「OOPARTS」を結成。「OOPARTS」解散後は、タレント・構成作家として HTB「水曜どうでしょう」などの数々の番組の企画・出演で活躍。愛称はミスター、ミスターどうでしょう。

2001 年より映画監督としても活動を開始。現在までに 4 作のメガホンを執る。2015 年にはテレビ東京系「ドラマ 24『不便な便利屋』」で自身初の連続ドラマ脚本・監督を務める他、作家としても活動。

2010 年には「OOPARTS」を鈴井自身のプロジェクトとして再始動させ、2022 年までに 6 作の舞台公演を上演。舞台という表現の枠にとらわれない作品を生み出している。

2021 年には、北海道コンサドーレ札幌オフィシャルサポーター就任。2022 年には、北海道コンサドーレ札幌社外取締役役に就任。NHK 北海道にて、毎週金曜 19:30 より放送中の「北海道道」メイン MC。

日 時: 2022 年 8 月 27 日(土) 11:00-12:20

会 場: 立命館慶祥中学校・高等学校よりオンライン LIVE 配信

写真提供: CREATIVE OFFICE CUE

第 27 回 全国私立大学附属・併設 中学校・高等学校教育研究集会
分科会・生徒発表 概要

分科会 A	※加盟校による実践研究及び調査研究【募集 B】採択校による研究発表 『SHIBAURA 探究 IT のカリキュラム・デザイン』 芝浦工業大学附属中学高等学校 岩田 亮（いわた りょう）氏 横山 浩司（よこやま こうじ）氏 小川 賢一郎（おがわ けんいちろう）氏 ・SHIBAURA 探究 IT は「テクノロジー」に着目したカリキュラム・デザインを実践。「何を学んだか」よりも「何ができるようになったか」を重視し、中 1 はプログラミング、ドローン制御、3DCAD 等を体験的に学び、中 2 は PBL を通して、オンラインふせんツールや自然言語処理技術を活用した市場分析サービスを使い、大学・企業と連携し、データ解析手法を学びます。発表では、授業設計・実践・効果等について報告します。
分科会 B	『「話す力」の育て方 ～中高生向けスピーチトレーニングの実践～』 株式会社カエカ 小倉 琳（おぐら りん）氏 ・新たな学び方が求められる中で、校内外でのスピーチやプレゼンテーションの機会が増えているのではないのでしょうか。スピーチのスキルアップをサポートしてきた株式会社カエカが、中高生向けのスピーチトレーニングの実践事例を紹介します。
分科会 C	『アイヌの歴史文化を未来へつなぐ 文化伝承の現在』 平取町教育委員会 教育長 庄野 剛（しょうの たけし）氏 ・平取町は北海道内でもアイヌ文化の伝承者が多く暮らすまちです。町内にはアイヌの歴史文化を学習する施設が整備され、貴重な資料も残されています。アイヌ歴史文化を未来へつなぐ、平取町の取り組みを紹介し、先住民の文化を守り多文化共生社会を実現する上での課題を共有します。
生徒発表 I	『中学生起業家の誕生から今まで そして僕は海を渡る』 Brooks Secondary School（立命館慶祥中学校・高等学校出身） 平松 瑞翔（ひらまつ みずと）君 ・中学生起業家として注目を浴びた生徒がこれまでの実践報告をします。 ・社会と学校を行き来することで得たもの、社会に出たからこそわかる学ぶ意味とは。
生徒発表 II	『これぞ立命館慶祥！ 日本初のボツワナ研修旅行について』 立命館大学国際関係学部 4 回生（立命館慶祥高等学校卒業生） 細川 翔平（ほそかわ しょうへい）君 ・日本初 ボツワナ大使館との連携により実現したボツワナ研修の実践報告をします。 ・社会とつながることで海外研修旅行が深まる様子をお伝えします。

来年度開催校校長あいさつ

昭和女子大学附属昭和中学校高等学校長 真下峯子

「第 28 回全国私立大学附属・併設中学校・高等学校教育研究集会」を、私ども昭和女子大学附属昭和中学校高等学校で開催させていただきます。2023 年 10 月 20 日（金）・21 日（土）の 2 日間、対面方式で実施する予定でございます。

新型コロナウイルス感染症の影響で、この 3 年、本教育研修会はオンライン開催でも、開催校 3 校のご尽力・工夫により、これまでの対面による研修と同様、さらに一層皆様との距離の近さを感じる大変実り多き集会になったと存じます。

一方、この研修の醍醐味である、北から南まで全国の先生がリアルに一同に会し、一つのテーマのもと、同じ空気を吸いながら研鑽に励む会にすることは、対面研修再開々開催の使命と感じております。本校がその重責を担わせていただくこととなり、誠に光栄であると同時に、身の引き締まる思いでございます。皆さまの期待に応えられますよう、万全の準備をしてお待ち申し上げますのでよろしくお願いいたします。

さて、本校では今年度からの研究テーマとして「自立した学習者の育成」を掲げました。すさまじいスピードで変化する社会と予測困難な現代社会において、学びで得た「知識」を生かし、さらにその「知識」を常に更新し「知恵」に変えて、活用していくことが、子どもたちにとって重要となっております。生涯「学び続けること」が求められる時代において、私たち教員自身が知的好奇心をもち学び続けることが、学び続ける生徒の育成に繋がります。そして「自立した学習者の育成」こそが、私ども教員の責務と考えます。私ども一人ひとりが学習者になって、この難解なテーマに取り組んでいきたいと考えております。来年度の研修会においては、同テーマのもと「基調講演」「分科会」を通し、参加者皆さまで活発に意見交換し、各校の進化・発展へのヒントをお持ち帰りいただければ幸いに存じます。

開催校である本校は、学校法人昭和女子大学の附属校です。38 年前から実施している「五修生制度」（高校三年生の 1 年間は、本校に籍をおきながら、昭和女子大学で学べる制度）や医系総合大学の「昭和大学」との特別協定など、生徒個々の進路希望に対応できるよう、長年高大連携を積極的に進めてまいりました。またキャンパス内に The British School in Tokyo（英国のインターナショナルスクール）や米国州立テンプル大学を誘致、米国 Boston に Showa Boston（宿泊施設を敷設した語学教育施設）を設置するなど、先進的に Global 教育を進めてまいりました。生徒「全員」が、「日常的に」多様性を体現する取り組みを進めております。こういった取り組みとその成果も発表させていただく予定です。

広大な敷地の学園内は、季節によってその表情を変えます。研修時期の学園内の銀杏並木は、黄金色に色づきはじめる頃と思います。生徒・教職員・学園の自然など総出で、皆さまのお越しをお待ち申し上げます。

なお、本年 10 月 21 日（金）には、来年度の教育研究集会の準備会も兼ねて、授業公開研究会を開催する予定でございます。こちらもご参加いただければ幸甚に存じます。

<https://jhs.swu.ac.jp/school/topics/news/2022/07/27/26030/>

